

## はじめに

先ず、町内会会員の皆様には、常日頃より町内会活動、行事に対して多大なご協力、ご理解を賜り、心より感謝とお礼を申し上げます。

私ども役員は、ボランティア活動の伝統を受け継ぎ、会員の皆様の思いを少しでも共有出来るよう、防災、防犯、環境整備の活動はもとより、交通安全、夏季祭礼、リクレーション、文化的活動に取り組んでいます。

さて、この度「深浦の歴史と文化財」を発行しようと思いついたのは、本年令和7年（2025）に深浦の鎮守様「大国主社」創建400年と「深浦町内会」発足75年を迎えました。

そこで、会員の皆様の世代交代と新規会員の方々も多くなり、「深浦の歴史と文化財」について、改めて町内の方々に知っていただきたいとの思いで、発行の運びとなりました。

深浦、鉦切は横須賀市の最北部に位置し、一帯はかつて丘陵が続き、浦々は海が深く入り込んだリアス式海岸で小さな島々が在りました。そこには縄文時代の夏島貝塚をはじめ、幾つかの貝塚遺跡が点在していました。また、江戸期より存続している社寺等もあります。しかし、明治以降海軍航空隊等の軍施設の進出に伴い、一般住民は他所に移転し住環境は大きく変化しました。戦後、軍施設の転用により民間企業が進出し戦後復興の一翼を担い、追浜地区は大きく発展し今日に至っています。

よって、その「出来事」を集めた「深浦の歴史と文化財」ですが、これを一読するだけで深浦の歴史の概要を知ることが出来ると思います。

この参考資料としては、深浦の歴史と文化財について、平成初期（約30年前）深浦の先輩である郷土史家、生方直方氏の編纂した「深浦に就いて」そして深浦文化シリーズの資料を基に発行させていただきました。

また追浜地域運営協議会発行の、上杉孝良氏編「新・追浜歴史年表」の深浦に関する部分を引用させていただきました。記して厚くお礼申し上げます。

令和7年5月

深 浦 町 内 会  
会 長 今 村 恭 啓

# 目 次

★はじめに	1
★目 次	2
I 深浦に就いて	3
1 概要	3
2 生活	8
3 土地の変遷	13
4 交通	17
II 深浦の文化財	19
1 大国主社に就いて	19
2 独園寺に就いて	23
3 観音寺に就いて	25
4 正禅寺と鉤切に就いて	27
5 官修墓地に就いて	30
6 夏島貝塚	33
7 明治憲法起草の地碑	34
8 予科練誕生之碑	35
9 昭和天皇行幸之碑	36
III 深浦の年表	38

# I 深浦に就いて

## 1. 概要

### ① 御浦郡

三浦郡の旧地名は「御浦郡」であり、御浦郡は「日本書紀」の持統天皇6年（古墳期692）5月の頃に記載されている。

※ 御浦郡は最初「御津」と称されたが、「津」としての重要性が無くなり、後に「御浦」となり更に「三浦」になったと考えられると伝う説がある。

「津」は港、船着場、渡船場、河口、河岸の意味がある。平安期に「御浦」が「三浦」に変化している。「三浦庄」は平安末期から南北朝期に使われた荘園名である。

衣笠庄は風土記にある庄名で、徳川期に使用された。

三浦郡と同じ地域で、現在の逗子市、葉山町、三浦市、横須賀市である。

※ 三浦郡は古事記の日本武尊東征伝説、平安期から中世迄は三浦一族の所領であり、近世はペリー来航等によく知られている。

古代から陸上、海上交通の要衝の地である。

※ 現在の深浦町内会管轄の内、

浦郷町3丁目 の旧地名は相模国三浦郡浦之郷村字深浦、

浦郷町4丁目 は浦之郷村字鉞切、であった。

### ② 御浦郷

「倭名抄」平安期の延長8年(930) に依ると、御浦郡に御浦郷、田津郷、氷蛭郷、御崎郷、安尉郷の五つの郷があった。大宝元年(701) の大宝令で中央集権体制が確立されて、国、郡、郷の行政区画が出来た。

### ③ 浦郷村

古文書、歴史書に初めて記載されたのは、永禄2年(1559) の古文書と、天正年間(1573～1591 戦国期) の小田原衆所領役帳で、続いて文化8年(1811) の「三浦古壽録」である。

### ④ 深浦

深浦の地名が古文書、歴史書に初めて記載されたのは、「三浦古壽録」続いて

「風土記」である。 地名の由来は深く入り組んだ港の意味と伝わる。

⑤ 鉾切

鉾切の地名の由来は、源範頼伝説の他にいろいろあるようだが、よく分からない。

源範頼伝説の詳細は「正禅寺と鉾切に就いて」の項目参照

⑥ 小字名

※ 深浦の小字名

字名は「深浦」「亀島」で小字名は「鉾切坂口」「家の谷戸」「石合」「小向」「中の上」「子の神」「牛久保」「見魚」「切通し」「坂中」「石場」「かんだいぶた」「寺の下」があった。

※ 鉾切の小字名

字名は「鉾切」で、小字名は「山之脇」「西鉾切」「東鉾切」「蒲ヶ谷」「追浜」「矢浜」「菖蒲ヶ入」と鉾切附属地として「夏島」「蒲谷新田」があった。

⑦ 統治、支配、行政、教育の変遷

※ 古墳期

持統天皇6年(692) 相模国守 布勢朝臣色布智

※ 奈良期

神亀元年(724) 神武寺が行基により創建。

天平勝宝10年(756) 御浦郡司 太田部直圀成

※ 平安期

延長8年(930) 前記 ② のとおり五つの郷があった。

康平6年(1063) 三浦氏の祖である村岡為通は、前九年の役に源頼義に従い、恩賞として三浦郡を与えられて衣笠城を築き「三浦氏」と称した。

天養2年(1145) 3月の官宣旨案に「三浦庄司・・・」とあるので「三浦庄」と呼称していた事がわかる。

※ 鎌倉期

治承4年(1180) 源頼朝鎌倉幕府開府し「榎戸湊」は鎌倉への物資取扱いの中心地であり、海上交通の要地であったので、幕府の直轄地になった。

宝治元年(1247) 宝治合戦により「三浦泰村」他三浦氏一門が減んでから、佐原盛時の領地となる。

文保3年(1319) 執権 金沢貞顕の支配。(金沢文庫文書)

元弘3年(1333) 新田義貞に依る鎌倉幕府滅亡。  
永正13年(1516) 北条早雲(後北条氏)の支配になる。

※『相模守護職』

三浦景継	六郎左衛門尉	～ 歴応元年(1338)
中条秀長	大夫判官	歴応元年(1338)～
三浦高道(聖林)	三浦介	観応2年(1351)～
川越直重	弾正小	文和2年(1353)～ 貞治2年(1363)
三浦高道	三浦介	貞治3年(1364)～ 永和3年(1377)
三浦高道(徳桑)	三浦介	永和3年(1377)～ 永応9年(1402)
三浦時高	三浦介	永享元年(1429)～
上杉定正	修理大夫	文明17年(1485)～ 長享2年(1488)
上杉憲房	民部大輔	永正7年(1510)～
三浦義同(道寸)	三浦介	～ 永正13年(1516)

※ 江戸期

天正18年(1590) 豊臣秀吉が小田原城(城主北条氏直)を落城させてからは、徳川家康の領地となる。

文禄3年(1594) 代官に長谷川七左衛門長綱が任ぜられた。  
浦賀愛宕山に代官屋敷があった。

天保3年(1646) 播州姫路藩 酒井雅楽頭忠誉の領地に。(15万石)

寛文4年(1664) 上州前橋藩 酒井雅楽頭忠清の領地に。

寛文6年(1666) 酒井雅楽頭忠清 幕府4代目の大老となり、浦郷、田浦、長浦3ヶ村が増加されて、三浦郡の所領は13ヶ村で3,438石余となっている。「寛文印知集」

三浦郡の13ヶ村とは、浦郷、田浦、長浦、逸見、横須賀、中里、深田、公郷、佐原、久村、久里浜、鴨居、走水であった。

延享元年(1744) 武州川越藩 松平大和守朝矩の領地に。(15万石)

寛延3年(1750) 浦郷(現在の追浜南町)に「浦郷陣屋」を設ける。

★ 享保(1716)から寛延(1750)頃の浦郷村の村高は、「相模国郷帳」に依ると500石であった。

文化8年(1811) 会津藩 松平肥後守容衆の領地に。(23万石)

文政4年(1821) 武州川越藩 松平大和守朝矩の領地に。

★ 三浦半島の東京湾側の半分が大和守で、相模湾側は大久保加賀守の領地となる。

★ 天保11年(1840) 浦郷村の村高は村高帳に依ると267戸716石であった。

嘉永6年(1853) ペリー 米国東インド艦隊司令官浦賀沖に来航する。

同年 ペリー 艦隊は江戸湾に侵入し、夏島沖に停泊し、近海を測量した。

安政元年(1854) ペリー 艦隊ミシシッピー号の水夫死亡につき、ペリー提督は夏島に埋葬することを希望するが、幕府の計らいで横浜村の増徳院境内の丘に埋葬する。現在の外人墓地の第1号である。

同年 横浜の応接所で神奈川条約(日米和親条約)が調印される。

同年 肥後熊本藩 細川越中守濟護の領地に。(50万石)

安政4年(1857) 異国船防禦など嚴重な固めのため、浪人等の郡内立ち入りを防ぐため、郡境の浦之郷村 2ヶ所、外3ヶ村に高札、小屋番を設ける。

文久3年(1863) 下総佐倉藩 堀田相模守の領地。(11万石)

慶応3年(1867) 徳川幕府の直轄地に戻り、代官は江川太郎左衛門。

★ 全国でも稀な支配の変遷を辿っているが支配大名10万石以上であった。

※ 明治以後

明治元年(1868) 徳川幕府大政奉還 神奈川県誕生  
神奈川県三浦郡浦之郷村となる。

明治3年(1870) 鉦切 正禅寺塾が開かれる。

明治5年(1872) 戸籍法の施行で、戸籍編成のため三浦郡を10区に分け、浦之郷村、田浦村、長浦村、横須賀村、逸見村他5ヶ村は1区となる。  
名主、年寄の名称を廃し、戸長、副戸長に統一する。

明治6年(1873) 「学制」(太政官布告)による「小学教則」の制定により、  
正禅寺塾を北浦学舎と改称、開校する。

明治7年(1874) 北浦学舎等を廃止し、自得寺を仮校舎として、名称を  
第1大学区第10中学区第55番小学本浦学舎と改称する。  
この年を現浦郷小学校の創立年と定めた。

明治8年(1875) 第55小学本浦学舎を第55番小学浦郷学校と改称する。

明治10年(1877) 公立小学浦郷学校が狭溢につき、本浦313番地に校舎  
を新築する。

明治11年(1879) 郡区町村編制法の交付により、三浦郡浦郷村に。

明治14年(1881) 前年に本浦地区が大火に見舞われ、民家65戸を焼失、  
小学浦郷学校等が類焼する。学校は深浦 観音寺に移転し開校する。  
教室が少ないため、鉦切だけ独立して正禅寺を校舎とした。

明治15年(1882) 第55小学浦郷学校は村立浦郷学校に改称する。

- 明治20年(1887) 浦郷村外3ヶ村組合で尋常高等併置の船越小学校が創設され、浦郷村の高等科進学の子供たちは、以後昭和11年3月までここに通った。
- 明治21年(1888) 村立浦郷学校は公立浦郷学校に改称する。
- 明治22年(1889) 町村制実施で、浦郷村、船越新田、田浦村、長浦村が合併して浦郷村となり、旧浦郷村は、浦郷村大字浦郷となる。
- 同年 公立浦郷学校、神応校舎で授業を始める。
- 明治26年(1893) 公立浦郷学校は小学校令の改正により神奈川県三浦郡浦郷村立尋常浦郷小学校と改称する。
- 明治40年(1907) 小学校の義務教育年限、4年間から6年間に延長された。
- 明治45年(1912) 尋常浦郷小学校、現在地に校舎新築、開校式を挙げる。6月8日を創立記念日とする。
- 大正3年(1914) 町制を施行し、浦郷村から田浦町になる。三浦郡田浦町浦郷字深浦、字鉦切となり、浦郷村は消滅した。役場は船越に置かれた。
- ★ 浦郷村は永祿2年(1559) から大正3年(1914) まで355年間記録上続いた。
- 大正12年(1923) 尋常浦郷小学校は、田浦町浦郷尋常小学校と改称。
- 昭和8年(1933) 田浦町が横須賀市に合併し、横須賀市浦郷字深浦と字鉦切となる。
- 同年 浦郷尋常小学校は横須賀市立浦郷尋常小学校となる。
- 昭和11年(1936) 浦郷尋常小学校に高等科を付設、浦郷尋常高等小学校と改称。
- 昭和16年(1941) 「国民学校令」が公布され4月より横須賀市立浦郷国民学校となる。
- 昭和20年(1945) 8月15日 戦争終結の詔書が放送される。
- 昭和21年(1946) 浦郷国民学校を浦郷小学校に改称する。
- 昭和21年(1946) 新制中学校が発足し、浦郷中学校が浦郷小学校内に設置、開校するも12月に浦郷を廃止し、田浦中学校を旧防備隊跡(現在地)に新たに設置、開校する。
- 昭和23年(1948) 横須賀市浦郷支所が新たに設置された。旧田浦憲兵分遣隊跡(追浜本町)に。後追浜支所に変更。
- 昭和24年(1949) 石渡直次氏(深浦在住)、第20代横須賀市長に就任。
- 昭和26年(1951) 浦郷支所管内の町界町名地番整理実施。

浦郷町、夏島町、追浜町、追浜南町、追浜東町、追浜本町、鷹取町の7つの新町名に分割変更になった。（現追浜行政センター管内）

※ 深浦は浦郷町3丁目と5丁目、2丁目、追浜東町の一部に分割変更。

鉦切は浦郷町4丁目と5丁目の一部、夏島町に分割、地番も各々変更。

尚、現在の深浦町内会の範囲は浦郷町3、4、5丁目である。

日向は浦郷町1丁目、榎戸は浦郷町2丁目に変更になった。

昭和29年(1954) 浦郷小学校創立80周年式典が行われた。

昭和30年(1955) 浦郷小学校分校(後の夏島小学校)が開校する。

校地は旧海軍鉦切用地に。

昭和35年(1960) 夏島小学校、浦郷小学校分校から独立して開校する。

同年 田浦中学校分校(後の追浜中学校)設置される。

昭和36年(1961) 追浜中学校、田浦中学校分校から独立して開校する。

昭和38年(1963) 県立追浜高等学校が開校した。

昭和47年(1972) 浦郷駐在所を榎戸から日向(現交番)に新築移転する。

昭和48年(1973) 横須賀市追浜支所を追浜行政センターと改称、公民

館を併設して開館する。(現在の分館)

昭和49年(1974) 6月8日 浦郷小学校創立100周年式典が行われた。

昭和58年(1983) 田川誠一衆議院議員(日向在住)自治大臣、国家公安委員長に就任する。

平成6年(1994) 追浜行政センターが現在地に新築移転し、開館した。

平成13年(2001) 横須賀リサイクルプラザ(通称アイクル)が開業した。

## 2. 生活

### ① 農間漁師

深浦は海に臨んでいる土地であるから、半農半漁の生活であり、三浦半島で云う「農間漁師」であった。農の繁忙期には男性は漁を休んで農作業をする生活であった。

※ 明治期以降浦郷村は要塞地帯になり、海軍航空隊等の施設が建設された。

そのため、軍事優先で漁場と時間は制限され、漁業以外の地場産業が無く生活は苦しかった。しかし昭和になってから海軍施設拡充に伴って雇用の道が開かれて、就職の機会を得る事になり、生活はより豊かになった。

航空廠は地元であったので、就職の他、勤務者を下宿に置く家が多く、生活は一転した。 家業の手助けをしない者は、海軍工廠、航空廠等に就職した。

## ② 漁業

※ 江戸期には 浦郷、長浦、横須賀、公郷の4ヶ村は、4艘張船以外なら走水から江戸品川迄は断り無く漁をする特権を有する「立浦」であった。

※ 立浦とは本漁業の特権と幕府直轄の支配を受け、幕府に漁を上納し、巡検役人を船で渡す水府役を請負い、他の漁村より格をもっていた。

※ 夏島より猿島への見通し線内の海は、鯛その他が多く、他浦他国船の密漁船が無断侵入して係争が度々あった。

延宝6年(1768)より武州の漁民の密漁が数回あった。

※ 立浦漁民の漁獲品は将軍に鯛、大奥に活魚を上納、江戸前の魚等を、江戸の人々の食膳に供されたが、その陰には漁民の労働と密漁との係争に大きな苦労があった。

※ 第8代将軍吉宗が、江戸・日本橋本船町に魚市場を開設する迄は鮮魚類の販売は立浦漁民の特権であった。

※ 武州小柴、富岡、本牧等の漁民は立浦漁民の許可が無ければ漁は出来なかった。

※ ペリー来航後 ペリー艦隊の浦賀来航後は、浦賀奉行所を中心に海岸防備が強化されて、漁民の課税の減額が無くなり、農民と同様に漁獲品の約3分の1を上納し、「懸物役」として漁船にも税がかかり一定数の魚が徴収された。その上年貢以外に賦役(漁船と水夫の徴発)、定普請、海上輸送、海上監視等海防の為に各種の重い課役に悩まされた。

そして不漁続きで漁民の生活は非常に困窮した。

※ 郷土史では深浦、鉦切、田の浦の3地区で漁船数238艘、漁獲品は鰻、ナマコ、エビ、鯛、カレイ、天草、海苔等の魚介類その他としている。

特に深浦、鉦切から小柴沖にかけてナマコが非常によく獲れたようであった。

しかし、海軍施設の拡充につれ、漁業は多大な発展を妨げ、区域も限定され漁業従事者である漁夫も職を転ずる有様で次第に減少した。

## ③ 漁業関係の古文書保存家

※ 屋号「よつや」(代々五郎兵衛) 石渡貞男家

状、101通 最古延宝8年(1680) 345年前 (令和7年現在)

冊子、111通 元禄4年(1691) 334年前 (令和7年現在)

船持ちの網元積荷問屋で、江戸肴問屋西宮重次郎との関係文書や、ナマコ仕切状、人請証文6通、契約書等文化的価値のある貴重な文書多数を保有。

※ 屋号「新屋」（代々磯右衛門）

状、 冊子系20通 宝暦2年(1752) 273年前 (令和7年現在)

明治2年(1869)の横須賀軍港出入願やナマコ漁の契約書等

※ 近況

令和3年(2021)10月現在の深浦の漁業従事者は14人で兼業者は3人である。

漁船数は5トン以下が10艘で、出荷先は殆どが横須賀東部漁業組合である。

主な漁獲品はワカメ、アナゴ、ナマコ、スズキ、タチウオ、メバル、コノシロ、黒鯛、鯛、車エビ等である。

★ 昭和55年(1980)より深浦湾の護岸整備工事着工し、深浦漁港を約2000㎡埋立て、漁業関連施設に使用すると共に、栈橋を構築して漁港としての機能整備を図っている。

#### ④ 住民 口伝によると

何時の時代か不明であるが、昔深浦には家が6軒あったと云われる。

6軒は屋号で大谷戸、よしや、上の家、桶屋、鳥屋、安兵衛であり、一番古い家は大谷戸で、祖は金沢藩（米倉丹後守 元禄9年(1696) 禄高1万2千石）の足軽頭を勤めたと伝えるが、金沢藩は当地に所領が無いのでこの説には疑問を抱く。

(石渡米蔵氏の話 明治38年生)

この6軒の家伝の貴重品により存続年を確認すると、

※ 屋号「大谷戸」昔は「石渡戸」と称していた（墓碑により確認）が何時頃か不明であるが、「石渡」「渡戸」に分れ、現当主は「石渡」を称している。

現在墓碑、明暦元年(1655) 風化による碑名数基あり。

※ 屋号「よしや」 明暦元年(1655) 370年前 (令和7年現在)

昭和19年の強制立退き時に約300年経過したと伝えられる。

家伝の位牌は老朽化のため全て廃棄処分した。

※ 屋号「桶屋」 元禄2年(1689) 336年前 (令和7年現在)

※ 屋号「鳥屋」 寛永2年(1749) 276年前 (令和7年現在)

※ 屋号「上の家」 天明2年(1782) 243年前 (令和7年現在)

菩提寺の自得寺は宝永2年(1625) 火災焼失した。

※ 屋号「安兵衛」 法事の際、廃棄処分した為現在保存するのは明治以降で、以前のものは皆無で詳細不明。

⑤ 口伝にない他家の存続年（家伝の貴重品により調査）を列記すると、

※ 屋号「たなか」 明暦4年(1658) 367年前 (令和7年現在)

※ 屋号「よつや」 延宝8年(1680) 345年前 (令和7年現在)

※ 屋号「うきちゃん」 元禄元年(1688) 337年前 (令和7年現在)

上記存続年の調査は一部で結論付ける事は難点があるが、此の種の「口伝」には虚報があるのは事実である。

⑥ 戸数、人口の推移

資料名	浦郷村（追浜地区）	
倭名抄	延長年間(923～930)	約50戸 1,000人
三浦古壽録	文化8年(1811)	250戸余
村高帳	天保11年(1840)	267戸
風土記稿	天保12年(1841)	267戸
皇国地誌	明治11年(1878)	397戸 2,274人
	明治24年(1891)	507戸 2,910人
浦郷村郷土史	明治44年(1911)	788戸 4,797人
田浦町誌	昭和3年(1928)	1,142戸 約5,700人
国政調査	昭和60年(1985)	11,606戸 34,788人
	平成2年(1990)	12,048戸 34,700人
住民登録	平成28年(2016)	14,897戸 31,946人
資料名	深浦（浦郷町3丁目）	
御興奉納帳	明治12年(1879)	約60戸
浦郷村郷土史	明治44年(1911)	117戸 673人
	昭和60年(1985)	418戸 1,201人
住民登録	平成6年(1994)	456戸 1,212人
深浦（浦郷町3・4丁目）		
住民登録	平成31年(2019)	853戸 1,752人

⑦ 姓名の戸数推移

深浦は「石渡」「白井」「渡戸」姓が多く、鉾切は「蒲谷」姓が多く居ました。

	石渡	白井	渡戸	計	その他	合計
明治末期	43戸 65%	15戸 22%	5戸 7%	63戸 94%	4戸 6%	67戸

昭和20年	62戸 46%	17戸 13%	4戸 3%	83戸 62%	51戸 38%	134戸
-------	------------	------------	----------	------------	------------	------

以下は深浦町内会会員名簿での統計

昭和47年	66戸 18.5%	21戸 5.9%	3戸 0.8%	90戸 25.3%	266戸 74.7%	356戸
昭和61年	61戸 18.5%	24戸 7.3%	3戸 0.9%	88戸 26.7%	241戸 73.3%	329戸
平成6年	63戸 18.8%	23戸 6.9%	2戸 0.6%	88戸 26.6%	246戸 73.4%	335戸
平成30年	50戸 14.9%	20戸 6.0%	3戸 0.9%	73戸 25.1%	251戸 74.9%	324戸

### ⑧ 石渡の姓について

石渡は深浦に多い姓だが、昔範頼が舟ではなく石伝いに渡って逃げた時に手助けした漁師に対して与えられた由緒ある姓と伝えられている。

### ⑨ 屋号

深浦、鉾切では上記の様に同姓が多かったので、各々屋号で呼ばれた。

※ お茶屋、魚屋、上の店、七右衛門、江戸屋、安兵衛、富田屋、安さん、鳥屋、ペッペさん、平蔵、宇兵衛、亀島屋、ウキちゃん、魚忠、半蔵、平松屋、桶屋、六右衛門ヨハベ、又七、伝五郎、喜之助、スナタ、よつや、たなか、大谷戸、与兵衛、久五郎久五郎、麻屋、煙草屋、隠居、新屋、新小買、治の助、しんでん、石ぐら 等がある。現在でも一部で呼ばれている。

### ⑩ 町内会組織

※ 戦前の昭和期に「旧深浦町内会」「旧鉾切町内会」が其々存在した。

また、其々青年会、消防団組織があり町内会と共に祭礼、盆踊り等を行っていたとのことです。しかし、当時の組織の詳細は不明である。

※ 昭和15年(1940) 北郷聯合町内会があり、現追浜地区の町内会は深浦、榎戸、日向、本追浜の他全部で11町内会があった。(横須賀市町内会要綱)

★ 当時の鉾切在住「蒲谷卯之助氏」の青年会についての話。

「青年会は15歳から入り、世話方と小頭という階級があり、この人達が役員だった。

小頭が一番上で二人いた。世話方は6~7人いた。そしてその人たちが

言ったことは絶対聞かなければならなかった。」とのことであった。

※ 昭和22年(1947) GHQ訓令で戦前からの町内会組織は解体された。

※ 昭和25年(1950) 1月 新たな町内会組織「深浦町内会」が発足した。

管轄区域は深浦と人口減少した鉦切が合併して、発足した。

初代会長に 石渡徳次郎氏 就任する。

※ 平成元年(1989) 4月 深浦町内会館を現在地(市有地)に新築移転した。

会館用地(面積163・71㎡)は町内会と横須賀市との間で30年間の「土地賃貸借契約」を締結した。

尚、旧会館は取壊し、用地は地主に返還後、元おかむら寿司になった。

### 3. 土地の変遷

#### ① 新田の埋立て

※ 明治元年(1868) 深浦と榎戸の境を新田開発し、後に宅地となる。

「しんでん」と呼ばれる屋号の家も出来た。

※ 明治4年(1871) 鉦切の蒲谷新田の埋立て着工し、明治12年(1879) 完成した。

面積約3万平方メートル

※ 大正7年(1918) 当時の深浦湾の奥の尖った「浜田屋」「平松屋」の間の海は平松

屋の渡戸竹次郎氏が村の世話役をしていた時に、青年会、消防団が主体となって、埋立て、共同用地として使用した。

関東大震災で約1m隆起した。

#### ② 軍用地への買収と強制立退き

※ 明治元年(1868) 横須賀製鉄所(後の横須賀海軍工廠)が徳川幕府より明治政府の所轄となり、政府は横須賀一帯を要塞地帯化を計画した。

※ 明治13年(1880) 夏島(鉦切住民の共同所有地)が買収される。

※ 明治32年(1899) 要塞地帯法が公布され、浦郷村も軍事の重要拠点となり、その後順次終戦まで土地、家屋の買収と強制立退きが行われた。

※ 明治43年(1910) 海軍水上機練習所として、追浜海岸一帯が海軍により接収され、その地先の埋立てが承認された。

※ 明治44年(1911) 深浦、亀島周辺一帯が海軍によって買収され、横須賀海軍建築部深浦出張所が開設される。

- ※ 明治45年(1912) 飛行場拡張のため、海軍は夏島地先公有水面の埋立て着手。
- ※ 大正元年(1912) 追浜に航空機格納庫1棟と滑走台の建設に着手。
- ※ 大正5年(1916) 海軍航空隊開庁し、その後飛行場用地として、埋立て土地造成が行われた。
- ※ 昭和5年(1930) 頃から昭和19年(1944) にかけて鉾切は約300戸の家が順次、強制立退き命令により、他の地域に移転した。  
よって鉾切の民家は数件のみとなった。
- ※ 昭和6年(1931) 航空廠建設工事に先立って、居住者の本店(ホンダナ)、よつや、安兵衛、仁兵衛、の家は海軍より強制立退き命令により移転した。
- ※ 昭和7年(1932) には航空廠が設置された。
- ※ 昭和8年(1933) 道路が新設された際、大正7年に埋立てした用地の一部が道路用地となり、明治44年開通した追浜トンネルと接続し、同時に榎戸～日向トンネルも完成開通し、現在の市道船越～鉾切線が全通した。  
深浦では新道建設の際、両側の何軒かの家に移転し現在のようになった。
- ※ 昭和16年(1941) 独園寺の墓地の一部が水上機試験水槽建設に伴い、強制立退きさせられた。 詳細は「独園寺に就いて」を参照
- ※ 昭和18年(1943) 海軍地下工場建設により、深浦トンネル東側、大国主社東側、独園寺入口東側の堀削が開始された。 堀削した土砂の一部は、現光工業の土地に搬出して埋立てられ、大部分は深浦トンネルの入口左側から魚忠前までと、深浦トンネル東町出口の両側の家屋を強制立退きさせた跡地に搬出し堆積された。
- ★ 浦郷町3丁目24周辺は昭和20年(1945) 8月20日迄に強制立退き命令を受け移転準備中に終戦を迎えたと云う。
- ※ 深浦の立退きの例 某家は昭和6年に第1回の移転をし、新居を深浦に構えた。  
昭和18年に地下工場の発掘土砂の廃棄用地に収容されて、第2回の立退きとなり追浜東町に移転した。 家屋は地下工場の発削事務所に使用されて解体撤去を逃れたので、終戦後に元の家に戻った。
- ★ 鉾切では、強制立退きを4回受けた人がいたとのこと。
- ★ 尚、戦前は横須賀、三浦地区の海岸線全域は、要塞地帯法により軍事機密とされ、付近住民の軍事施設への立ち入り、丘陵地帯への無断な立ち入り、写真撮影、等が厳重に禁止されて、当時の様子の記録、写真等は殆ど残っておりません。

### ③ 戦後の変遷(旧軍用地、企業、住宅等)

- ※ 昭和20年(1945) 8月 現在の浦郷町5丁目、夏島町にあたる軍用地(海軍航空廠、追浜海軍航空隊飛行場等)は米進駐軍により接收された。  
同時に横須賀海兵団(稲岡町 現米国海軍基地)にも進駐。
- ※ 昭和22年(1947) 3月 光工業株式会社(浦郷町3丁目)設立される。
- ※ 昭和22年(1947) 12月 日本和紡興行株式会社(浦郷町5丁目)設立される。
- ※ 昭和23年(1948) 8月 米陸軍特需会社富士自動車が横須賀海軍航空隊跡地に  
進出、米軍の車両修理、再生を主要業務として米軍と契約。 昭和33  
年(1958)までに再生した米軍車両は、のべ22万9,100台の及んだ。
- ※ 昭和24年(1949) 4月 追浜運動公園が開設される。
- ※ 昭和24年(1949) 7月 石渡直次氏(深浦在住)第20代横須賀市長に就任。
- ※ 昭和24年(1949) 10月 米軍より旧海軍航空技術廠10万坪(総数約60万坪、現  
浦郷町5丁目)日本政府に返還された。 同年11月追浜運動公園の追  
浜球場が竣工し、プロ野球の公式戦が行われた。
- ※ 昭和25年(1950) 6月 接收解除後、返還され「旧軍港市転換法」が公布、施  
行され、旧軍港市の平和産業港湾都市への転換が図られるようになる。  
主な目的は国有財産の払下げに伴う特別待遇であった。
- ※ 上記法律の公布、施行に当たっては、前年昭和24年7月 就任の石渡直次市長  
(深浦在住)の国に対しての強力な陳情の成果であったという。  
よって、後に深浦、鉾切地区に多くの企業が進出し工業団地となった。  
また追浜運動公園、行政施設、学校等の公共用地となりました。
- ※ 昭和25年(1950) 9月 太陽商事株式会社(浦郷町3丁目)設立される。
- ※ 昭和25年(1950) 11月 京浜発條株式会社(浦郷町5丁目)設立される。
- ※ 昭和29年(1954) 浦郷町4丁目に 県立横須賀公共職業指導所 が開設。  
その後、平成20年(2008) 3月 54年間で閉鎖された。  
★ 平成27年(2015) 4月 その跡地に60戸の分譲建売住宅が完成し、入居  
者は深浦町内会に入会した。(23組~26組)
- ※ 昭和33年(1958) 6月 株式会社オカムラ(浦郷町5丁目)操業開始する。
- ※ 昭和34年(1959) 6月 追浜米陸軍兵器廠跡地約47万5千坪が14年ぶりに返還  
されることになり、返還式が行われた。  
★ 同年 日産自動車株式会社 追浜地区払下げの申請をした。
- ※ 昭和35年(1960) 4月 イシカワ製作所株式会社(浦郷町5丁目)開設される。
- ※ 昭和35年(1960) 6月 関東自動車工業株式会社(浦郷町5丁目)操業開始。  
★ 平成12年(2000) 工場が閉鎖され移転した。 39年間の歴史であった。

※ 昭和35年(1960)10月 東邦化学工業株式会社(浦郷町5丁目)開設される。

※ 昭和35年(1960)10月 追浜工業会が結成される。

(第2次接收解除により進出した企業で組織)

※ 昭和36年(1961)4月 日神機工株式会社(浦郷町5丁目)設立される。

※ 昭和36年(1961)6月 追浜プレス企業組合(浦郷町3丁目)設立される。

※ 昭和37年(1962)2月 日産自動車株式会社 追浜工場 操業開始する。

※ 昭和37年(1962)6月 株式会社青木製作所(浦郷町5丁目)設立される。

※ 昭和37年(1962)6月 シンジーテック株式会社(浦郷町5丁目)設立される。

旧海軍航空技術廠本庁舎に入居する。(旧 北辰工業株式会社)

※ 昭和38年(1963)10月 株式会社瀧澤鋳機製作所(浦郷町3丁目)設立される。

※ 昭和39年(1964)4月 有限会社栄光製作所(浦郷町5丁目)設立される。

※ 昭和44年(1969)4月 海軍航空技術廠水上機試験水槽地は国より横須賀市に移管され、そこに「市営深浦改良アパート」が完成し、75戸が入居した。

★ 平成27年(2015)11月 老朽化のため、解体することになり入居者の移転完了。令和3年(2021)11月解体され更地に。46年の歴史であった。

※ 昭和44年(1969)9月 夏島運輸株式会社(浦郷町5丁目)設立される。

※ 昭和46年(1971)12月 住友重機械工業株式会社(夏島町)操業開始する。

※ 昭和47年(1972)4月 旧第1航空技術廠、横須賀海軍航空隊及び附属追浜飛行場の土地が返還され、この日までに接收地全地域が国に返還される。

※ 昭和48年(1973)12月 海洋科学技術センター(現海洋研究開発機構)が開所式を挙げる。

※ 平成8年(1996)4月 深浦町内会館前の「浦郷みなと緑地」と深浦漁港整備事業と「深浦ボートパーク」が完成した。緑地は町内住民のスポーツに、子供広場として、夏まつり演芸大会として利用している。

※ 平成13年(2001) 横須賀リサイクルプラザ(通称アイクル)が開業した。

※ 平成14年(2002)5月 有限会社坂庭資源開発 深浦に移転事業開始した。

※ 平成17年(2005)12月 株式会社マルコ(浦郷町5丁目)操業開始した。

※ 平成18年(2006)4月 株式会社東京ガス横須賀パワー 竣工発電開始した。

※ 平成22年(2010)11月 夏島都市緑地に第三海堡の遺跡展示場が開設される。

※ 平成23年(2011)4月 グループホーム「あんずの家」業務開始した。

※ 平成24年(2012)5月 深浦の最高地点「見魚台」と呼ばれる台地にマンション「ルネ追浜」一期工事竣工し、以後3年間で3街区490戸が入居した。同時にマンション北側の「浦郷3丁目公園」を開発業者が市に提供した。

尚、マンション敷地は昭和63年(1988) 開発業者により買収されたが、不動産バブル崩壊のため、24年後まで建物の建設が遅れた。

※ 平成27年(2015) 4月 「あすりはデイサービス」 アイ・ライフ・サポート合同会社(浦郷町3丁目) 業務開始する。

※ 平成29年(2017) 4月 浦郷町4丁目12 日産自動車浦郷寮の敷地最深部の土地を不動産開発業者により、60戸の分譲建売住宅が完成した。  
入居者は深浦町内会に入会した。 (27組~31組)

※ 令和元年(2019) 6月 深浦「天子台」の約450坪の敷地に介護付有料老人ホーム「花珠の家 よこすか」が落成し開業した。

★ これで深浦の丘陵部分(見魚台、天子台)の土地は7階建マンションと4階建老人ホームのビル建設により、深浦湾からの風景が大きく変わりました。

#### 4. 交通 (海上交通、鉄道、道路とトンネル)

##### ① 海上交通

榎戸を挟んで、日向、深浦、丘を背に巡らした三村が湾の海辺を分担し、日向の舟大工、深浦は漁業を主とし、湊の榎戸には商店と、細やかな歓楽もあって人々は、この独立する生活圏の中で安らかに暮らしてきた。

榎戸湊は鎌倉時代からのもので大いに栄えた。

明治になり横須賀(吉倉)、横浜に行くにはポンポン発動機渡船就航は近代化のはしりで、大いにいに賑わった。

しかし、昭和初期国道16号線開通と京急追浜駅が開業すると、不便な渡船は、たちまち廃業し、取り残された湊は急激に軍用化の途を歩んだ。

※ 定期航路 横須賀~榎戸~金沢 船賃 榎戸~横須賀 6銭  
不定期航路 榎戸~横浜~東京 横須賀~金沢 8銭

##### ② バス

バスが横須賀線田浦駅から、深浦のやぐら(桶屋の前の山)前迄開通した。

バスは米国製の6人乗りで、田浦駅~榎戸、 1日15往復 田浦駅~深浦 1日7往復したと伝えられる。 所要時間は約15分であった。

深浦迄の開通時期は不詳であるが、鉦切迄は明治44年(1911) 2月追浜トンネル開通以降と思われる。 鉦切の油屋が終点であった。

※ 現在 田浦駅～深浦循環～追浜駅、日産自動車～磯子駅、の2路線がある。

★ 深浦在住「金沢友治氏(元町内会役員)」の当時についての話。

「バスは、田浦駅を出て船越を回って日向(梅田旧道)に出て、大久保トンネルを  
通って田川宅に下りてきて榎戸に出て、能永寺前から旧道の海のへりを通って山  
の手に入って、魚元さんのところを回って七曲りの平松屋に出て、鉾切に行ってい  
た。」とのことであった。

### ③ 鉄道

※ 明治22年(1889) 横須賀線が開通し、横須賀駅開業した。

※ 明治37年(1904) 田浦駅が開業した。

※ 昭和5年(1930) 京浜急行 黄金町～浦賀間が開通し、追浜駅が開業した。

※ 昭和8年(1933) 浦賀～品川間、直通運転開始される。

※ 昭和47年(1972) 11月 追浜駅の橋上駅舎が完成、営業を開始する。

※ 平成11年(1999) 7月 追浜駅がダイヤ改正でラッシュ時を除き、普通車のみ  
の停車駅となった。

### ④ トンネルと道路

※ 梅田トンネル 明治20年(1887) 地元民によって日向～船越間で開通する。

※ 筒井トンネル 明治38年(1905) 榎戸～追浜東町間で開通する。

※ 深浦トンネル 明治44年(1911) 独園寺第11世至道泰嶺和尚が手掘りで堀削して  
開通した。 詳細は「独園寺に就いて」を参照

※ 追浜トンネル 明治44年(1911) 開通。それ迄は深浦から鉾切に行くには鉾切坂  
を登って山越えし、正禅寺脇に出たが、開通後は道が平になり近くなった。  
昭和8年(1933) 10月に拡幅され内部をコンクリート打込みに整備された。  
平成元年(1989) にも内部が改装された。

※ 榎戸トンネル～日向トンネル 昭和8年(1933) 横須賀市と合併の際、鉾切から  
船越までの新道建設するとの条件の中で、追浜トンネルの拡幅、深浦～  
榎戸間の榎戸トンネル、日向～梅田間の日向トンネルが開通した。  
この道路は深浦の幹線道路で現在の「市道船越、鉾切線」になっている。

※ 国道16号線とトンネル 大正14年(1925) 国道31号(現国道16号) 浦郷トンネ  
ル 竣工する。 同年、改修工事も田浦～吉倉間を除き完成。

又、本浦駐在所から航空隊正門迄(現夏島貝塚通り) 幅9mも完成する。

★ 昭和3年(1928) 国道31号(現国道16号) 現追浜町から逸見迄7つのトンネ  
ルで結ばれ開通する。 その後、観音崎迄が国道16号線となった。

★ 昭和36年(1961)3月 国道16号 新浦郷トンネル竣工する。

これで、上下線2本のトンネルとなり、4車線化した。

※ 夏島貝塚通り 平成8年(1996) 市が募集した道路の愛称に「夏島貝塚通り」と命名された。追浜駅前～海洋科学技術センター入口迄、3.5km。

※ 山之脇トンネル 平成20年(2008) 浦郷町3丁目～4丁目間に竣工。  
マンション「ルネ追浜」建設に伴い開通したもので、夏島町交差点付近より追浜東町2丁目迄の道路が、新たに開通した。

※ 国道357号(東京湾岸道路) 延伸建設計画国道 国道357号は、千葉市より横須賀市に至る延長80km(神奈川県区間は延長35.1km)の一般国道です。  
金沢区の埋立て地から終点部となる夏島町までの区間については昭和63年(1988)6月都市計画決定がされ、平成5年(1993)に八景島まで開通したが、その後長期にわたり未整備の状態が続いていました。

平成30年(2018)7月 やっと八景島から夏島町交差点まで工事期間10年の計画で着工されました。しかし、浦郷3町内会と追浜連合町内会では夏島交差点以南の延伸計画が未定のため、計画の早期具体化を図ることを国、市に対し要望しています。このままでは浦郷、追浜の道路は大渋滞となり、生活に大きな影響が出るものと懸念されます。

## Ⅱ 深浦の文化財

### ① 大国主社に就いて

概要

所在地



横須賀市浦郷町3丁目41番地 (旧地名、番地) 横須賀市浦郷字深浦3, 987番地

創建 寛永2年(1625) 令和7年(2025)で満400年を迎えました。

祭神 大国主命、宇賀之御魂神、事代主命、

社殿 明治16年(1883) 11月再建  
本殿流造4坪、幣殿1坪、拝殿入母屋造5坪  
3棟1字 瓦葺木造建造物

※平成15年(2003)12月 老朽化した社殿の改修工事を行った。  
耐震化のため瓦葺屋根から銅板に新しく葺き替え軽量化を図り、内外装を改修し、奉納された石灯籠一对を新設し、鳥居も塗り替えた。  
総工費650万円は深浦町内の皆様の寄進により、猪狩工務店が改修工事を行った。

境内 129坪(約426平方メートル)

鳥居 「神明鳥居」で鉄製の朱塗りである。 造立年月は不詳

氏子 令和2年(2020)現在 380戸 約1,200人

神輿

大神輿 祭神は須賀大神

※明治12年(1879) 深浦の約60戸で奉納された。

※大正12年(1923) 彩色、補修をしている。

※平成21年(2009) 解体修理、修復工事が竣工し町内に披露した。

工事業者は鎌倉市一二所 株式会社東京神輿センター

神輿本体分解、再組立て、本漆塗り直し、金具取り外し、金メッキ再処理後の取付け等の工事をした。

総工費528万円 氏子会、町内会、柏樹会で負担した。

中神輿

※令和2年(2020)(財)矯正協会より新規購入した。

台車含み金70万円 町内会、柏樹会で負担した。

旧中神輿は老朽化し渡御時危険なため、供養し廃棄した。

子供神輿

製作者 導入時期等詳細は不明です。

山車(屋台)

※昭和29年(1954)新調した。 山車新調の采配は白井若次氏で氏子各位の寄進により、約15万円を要した。 当時の氏子総代は石渡万之助氏 製作者は馬堀町の宮大工 岩沢大吉氏である。

祭礼

春季祭礼 毎年3月 第1日曜日

夏季祭礼 毎年7月 第3土曜日 宵宮 第3日曜日 本祭り

秋季祭礼 毎年10月 第1日曜日

初詣 元日 午前0時より

#### 浄水盥

枕型 火成岩

高 39cm 上辺幅 88cm 下辺幅 80cm

上面立幅 30cm 横幅 88cm

池 花頭型に刳込 縦 26cm 横 26cm 深 6cm

銘文 奉納（前側面） 願主 石渡五郎左衛門

#### 力石

1基 長丸形の川原石 江戸時代もの？

寸法 縦 80cm 横 24cm 厚さ 32cm

※ 銘 四十五ノ 約170kg 白井三治（担いだ記念署名）

昔は祭礼時に若者は力自慢を競った習慣があった。

追浜地域の社寺で力石の所在するのは大国主社のみである。

この力石は民族資料として後世に伝えられる可きと思考される。

#### 御神木

境内の銀杏樹2株 昭和3年(1928)に昭和天皇御大典記念樹として植樹されたものである。また昭和天皇御在位60年及び平成御大典記念樹がある。

#### 金文字の額

※ 拝殿前面に立派な金文字の額が掲げられてある。（文字は縦書き）

昭和三十六年五月吉日
奉 精 心 一 致
大 漁 祈 願
納 石 渡 金 蔵
外 網 船 一 同

漁民が大漁満足、海上安全を祈願したものである。

#### 由緒沿革

※ 元和5年(1619)に開創された独園寺の鎮守社として、寛永2年(1625)に独園寺境内に創建された。当初の社名は「大黒天社」で、度々改名されて現在の「大国主社」になっている。

当初の祭神は大国主命（大黒天）と恵比寿天の木造があった。

その後、大黒天社祭神の恵比寿天像は慶応3年(1867)の王政復古、明治元年

(1868)の神仏分離で独園寺に戻された。

※ 鎮守社創建の頃の深浦(浦郷町3丁目)は漁業が非常に繁栄した時代で、農業は従の半農半漁で、三浦半島で云う農間漁師であったから、漁業の恵比寿さん、農業の大黒さんは絶大な信仰を得て、近村からの参詣者は非常に多かったとのこと。

※ 大黒天社創建時の深浦には、村の鎮守社が無かったので、村の人々は独園寺の鎮守社を村の鎮守様のように崇敬した。

#### 神社名の変遷

寛永2年(1625)	大黒天社	風土記	(創建時)
明治21年(1888)	甲子社	陸軍地図	
明治27年(1894)	深浦社	浦郷村地図	
昭和3年(1928)	大国主社	田浦町誌	
昭和28年(1953)	大国主社	法人登記簿	

#### 祭神について

大国主命 = 大国主神 = 大国主大神

別称を 大己貴神(オオマナムチノカミ)、大己貴命(オオナムチノミコト)等多くの名がある。

※ 七福神の一人で、笑った顔で右手に打出のこ小槌、左肩に袋を背負い米俵の上に立つ姿で表せる代表的な福德神であり、農耕神、国土開発、縁結びの神として信仰されている。

※ 出雲神話の主人公で因幡の白兔神話で有名である。

※ 大国主命を主神とする神社は、島根県大社町の出雲大社と奈良県桜井市の大神神社(おおみわじんじゃ、最古の神社)である。

#### 大国主社に合祀された旧稲荷社、旧亀島明神社について

##### ※ 旧稲荷社

大黒天社への合祀は明治16年(1883)社殿が再建された際に、稲荷社の社殿が老朽化したので合祀した。

稲荷社の祭神は 宇賀之御魂神(うがのみたまのかみ)所在地は屋号又七さん(現在の白井信行氏)の上にあつて、そこには榊の大木があつたが、社殿の規模は不詳である。

##### ※ 旧亀島明神社

創建 寛文12年(1672) 大黒天社より47年後の創建。

祭神 事代主命(ことしろぬしのかみ)

所在地 現在の浦郷町5丁目東邦化学工業株式会社構内にあって創建当時は周囲220メートルの亀の形に似た小島で、枝振りの良い見事な老松樹があり、灌木が蜜生していた。

明治44年(1911) 亀島に横須賀軍港防波堤築造工場が出来て深浦湾の東側が埋立てられた。 その時亀島の東側は崩されて岸に接続された。

昭和3年(1928) 亀島明神社の境内が海軍用地として買い上げられたので、大國主社に合祀された。

## ② 独園寺に就いて

概要

所在地



横須賀市浦郷町3丁目42番地

(旧地名、番地) 横須賀市浦郷字深浦3, 985番地

宗派 禅宗、臨濟宗、建長寺派

創建 元和5年(1619) 令和元年(2019) 創建満400年

開山 一峰幹在和尚

自得寺第4世住職、正禅寺住職となり、その後隠居して独園寺を開いている。

本尊 木造の宝冠釈迦如来坐像

寺宝 木造一峰幹在座像、恵比寿神半跏像、薬師如来立像、阿弥陀如来坐像、地藏菩薩坐像等の木造や涅槃画像が残されている。

独園寺について

※ やぐら

この寺の境内には室町時代と思われる「やぐら」や「五輪塔」が多数祀られて、一峰幹在和尚以前にも寺が在ったのではないかと推定される。

※ 古い墓地の西側には「やぐら」が7～8穴あり古老の話では、当時は土葬であったため、この「やぐら」に仮埋葬し、七回忌の法事を済ませると掘り出して洗骨し、各

自の墓地に埋葬するのが深浦の習慣であった。

また出産の際の汚物はビンに入れ、この「やぐら」に捨てたのでビンが山となっていたとのこと。

※ 創建以前の墓地について

墓地には当寺の檀家は無く、他寺の檀家の墓塔が30数基あり、多くは自得寺、良心寺等の檀家で皆深浦の旧家である。

自得寺、創建 明徳年間(1390～93) 従って開創以前の当時の境内は深浦の共同墓地的な存在であったと思われる。

※ 庚申塔

寺の入口にある庚申塔は、上部が欠けているが年代的には古いもので「寛」という年号が読み取れ、江戸中期の庚申塔といえる。

右の庚申塔は明治15年(1882) 6月の造立で施主は石渡作五郎とあり、日月、三猿、合掌清画金剛が彫られた駒形庚申塔である。

※ 独園寺の鎮守社

元和5年(1619) 独園寺が開祖されると、寛永2年(1625) に境内に鎮守社が創建された。

社名は 大黒天社 (現在の大国主社)

祭神は 大黒天像、恵比寿天像

明治期神仏分離で大黒天社は独立し、深浦の鎮守様となった。

祭神の恵比寿天像は独園寺に返還された。

※ 半鐘

元禄13年(1700) 10月15日 石渡五郎左衛門(現浦郷町3丁目 屋号「しんでん」石渡郁夫氏の先祖)の寄進である。

★ 後日談 この半鐘は戦時中、供出したが終戦後、返却通知があり受取に行ったが、先着の某寺が持ち帰ってしまい、やむなく残った鐘の中から一つ持ち帰ったとのこと。しかし何年か後に某寺より、お返ししたい旨連絡があり、無事に返還された。

※ 深浦トンネルについて

明治44年(1911) 独園寺第11世道泰嶺和尚が手掘りで堀削り、開通させた。

人と大八車が通れる高さ1.8m 幅1.2mの素掘りのトンネルであった。

トンネルが出来る迄は追浜に行くには、観音寺の坂、天子台の坂、又は深浦トンネルの上を登って東町に出たので、非常に便利になり喜ばれた。

昭和7年(1932) 海軍航空廠が開設され、追浜駅よりの主要道路となり現在の大きさに拡幅され、通勤の人達で行列をなしたという。 　　しかし、内部は素掘り

のため落盤防止に部分的に天井にトタン屋根を設置した保護設備が出来、数箇所に裸電球が点灯された。

昭和47年(1972)に大改修され、その後も数回改修されている。

※ 水上機試験水槽建設に伴う墓地の一部移転について

昭和16年(1941)海軍航空技術廠水上機試験水槽2基建設のため独園寺の裏山の墓地を切崩す為に、強制撤去命令が出て移転を余儀なくされた。

移転先は、南側(現在の山上墓地)に墓地を新設した。

★ 終戦後、試験水槽は解体撤去され、敷地の大部分は横須賀市に移管され市営深浦改良アパートになった。現在のイシカワ製作所株式会社に隣接した市道の上にコンクリートガードの構築物が一部残っている。

※ 昭和30年(1955)境内に「大東亜戦争戦没者慰霊塔」が建立された。

### ③ 観音寺に就いて

概要

所在地

横須賀市追浜東1丁目71番地

(旧地名、番地)横須賀市浦郷字深浦4, 191番地

宗派 浄土宗、良心寺末

開山 貞享4年(1687)清蓮社布誉万 和尚

開基 鎌倉屋長右兵衛 武州豊島郡江戸本船町

本尊 木像十一面観音菩薩像

室町時代後期の作と伝える伝説として、日本橋のご隠居が思い立って諸国修行の旅に出て、日向の国の岩屋で一夜を過ごした。その時夢枕に観音様がたち、女人の安産、子育てを受けるようお告げがあった。

その後、船で東国に向かう途中で暴風に遭い、難破し深浦に漂着した。

そして、ここぞ有縁の土地であるということで観音様を祀ったと云われている。

安産、子育ての観音として信仰が厚い。

普段は厨子(理由は不明だが、扉には葵の紋と桐の紋が彫られている)に納めら



十一面観世音菩薩像

れている。

12年毎の午年（うまどし）に本開帳、丑年（うしどし）に半開帳をしている。

航海安全、大漁祈願の寺として、深浦の漁師の人たちの信仰を集めている。

寺宝 七観音像（千手観音像、如意輪観音像など）

本尊を囲むように祀られている。弘化3年(1846) 深浦、鉦切など近隣の信者が寄進し鎌倉の仏師三橋永助が造立したものと云われる。

※ 阿弥陀三尊像

七福神 寿老人

観音寺について

※ 三浦三十三観音第二十二番札所で、以前は住職がいたが現在無住職になっており良心寺の兼務寺である。

※ 寺は墓なし（ただし初期の住職の墓はある）檀家なしである。

現在お寺の管理は世話人が行っている。

※ 昔から観音信仰の隆盛さを物語るものとして、沢山の絵馬が本堂に祀られている。

※ 明治14年(1881) 浦郷小学校は校舎火災のため、7年間観音寺を仮校舎とした。

周辺について

※ 周辺は見魚台（きんぎょだい）と呼ばれた台地（現在のルネ追浜マンション）の南端に位置し、眼下は深浦湾、猿島、小原台、前面に東京湾を隔て房総半島を望み、左には夏島、金沢沖、本牧沖が眺望できる風向明媚な景勝の地であった。

朝倉能登守埋蔵金伝説

※ このあたりは朝倉能登守の城址という説があり、観音寺は本丸跡といわれ、正禅寺裏山に砦と思われる遺構が、大手は筒井トンネル上の丘陵地、搦手は深浦トンネル上の丘陵、館は正観寺寄りで榎戸湊が視界に入り、口伝では「別宅」と言われた埋蔵金伝説が残っている。昔から浦郷一帯に「朝日さす 夕日輝くもろの木に、漆千杯銭が十億万両」と語り継がれた歌がある。

昭和初期には付近が掘られたが、埋蔵金は発見されていない。

昔の様子 元深浦町内会々長「石渡万之助氏」の話。

★「昔は境内に桜の木がたくさん植えてあり、お花見で賑わった。松の木の太さでも多く子供5、6人で廻るほどの太さであった。お十夜には近郊から大勢お参りに夏の楽しい行事で、午後は露天商が境内に天幕を張り、夕方になり鉦や太鼓になると老

いも若きも提灯を持って坂道を駆け上がっていった。 お十夜には子供たちは夜店が目当てで、若衆は娘さんが目当てであった。 大正の初期までは大相撲もかかった。」とのことであった。

#### 浦郷八景について

※ 安政5年(1858) この風景を文人旭松閣吉隆が「浦郷八景」として詠んだ。

夏島秋月	夏島や四方の海原うちはれて、ながねつきせぬ秋の月
勝力帰帆	もののふの矢よりも早き勝力の、真帆うちかけて帰る釣船
箱崎夜雨	箱崎や明けなばいかに夜もすから、雨の音そふ岸の松風
吾妻晴嵐	嵐ふく吾妻の峯に雲はれて、とふねもなみの花ぞきにける
洲口落雁	見渡せばかりがね落るすのくちの、岸によるなみ音もとだへて
榎戸夕照	榎戸や夕づく日なたさしむかひ、てりそふ影の深きうらうち
亀島暮雪	としつもる亀島山のしら雪は、むらがりやすむ鶯にぞありける
独園晩鐘	かならずと暁かけてちきりしも、独り園生のいりあひにかね

#### ④ 正禅寺と鉞切に就いて

##### ★正禅寺に就いて

##### 概要

##### 所在地

横須賀市浦郷町4丁目5番地

(旧地名、番地) 横須賀市浦郷字鉞切2、925番地

宗派 臨済宗、建長寺派、得寺末

開山 大永年間(1521~28) この頃、暘谷幹瞳、開基創建する。  
なお、正禅寺の開創は慶長年間(1596~1615)の伝もある。

開基 達道建永禅師

本尊 聖観音菩薩像

寺宝 暘谷幹瞳禅師座像

七福神 毘沙門天

やぐら 本堂裏には、お墓を意味する本格的な「やぐら」が残っており、崖面に梵字が彫



られている。

- ※ 万治2年(1659) 境内に板碑型三猿二鶏庚申塔が造立される。
- ※ 弘化3年(1846) 鎌倉仏師大石左門、木造大黒天像を造立する。
- ※ 明治3年(1870) 正禅寺塾が開かれる。但し、維新前から寺子屋教育はあった。
- ※ 明治6年(1873) 正禅寺塾を北浦学舎と改称、開校する。
- ※ 昭和27年(1952) 境内に「大東亜戦争戦没者慰霊塔」が建立される。

#### ★鉞切に就いて

- ※ 夏島貝塚 詳細は「深浦の文化財」⑥ 夏島貝塚 を参照
- ※ 鉞切遺跡群跡 弥生時代後期から古墳時代に海浜部の集落が出来たころの古代人の生活の後である。

所在地は追浜運動公園端から自衛隊官舎、正禅寺裏の権現山周辺にかけてである。

昭和23年(1948) から昭和58年(1983) にかけて数回発掘調査が行われ、古墳時代の牛頭骨を使った最古の祭祀遺跡をほぼ完全な形で発掘、発表して大いに注目を集めた。 この祭祀跡の遺跡は、牛の頭を使う古代人の精神文化面を研究する上でも貴重な資料となったそうである。

この地は明治時代初頭に蒲谷新田開発がされ、大正時代に旧海軍航空基地建設で埋立てられて軍用地となった。 よって昭和20年(1945)終戦までは一般人は立ち入りが許されない場所となり、遺跡は終戦後に発見された。

- ※ 鉞切の地名の由来

由来は、源範頼伝説の他にも色々有る様だが、よく分からない。

源範頼伝説には、源頼朝に反逆の疑いをかけられた弟の蒲冠者範頼は伊豆の修善寺に押し込められるが、ひそかに修禅寺を逃れて榎戸の港に上陸し、漁師の兵衛衛に助けられ、蒲ヶ谷と呼ばれた谷戸（現在の神明社の移転先付近）にあった「やぐら」に隠れ住んだといわれる。 しかし、鎌倉の間者に知られるところになり、ついに襲われるが、平兵衛は鉞をふるってこれを倒すが、範頼はもはや逃られぬことを悟り、金沢室ノ木にある大寧寺に入り主従共々自害したと伝えられる。

- ※ 追浜の地名の由来、変遷

旧浦郷村の最北端に、烏帽子巖があった。 今は埋立てられた島であったが、ここから弓状に南下する海辺一帯の浜を、追浜と呼んだそうだ。

金沢瀬戸神社に残る寛文10年(1670) の「檀家諸事控」に「乙浜」と記述がある。 天保12年(1841) の「新編相模國風土記」には、浦之郷村は江戸より行程13里、古

くは浦ノ郷村とも記され、戸数267とあり、村東字追浜との記述がある。

明治16年(1883) 浦郷村戸長が県に提出した「字地書上」では、「おっぱま」のふりがながあったという。「乙浜」が「おいはま(追浜)」を経て「おっぱま」に変わった、との説もある。伝説の蒲冠者範頼が兄、源頼朝の手勢に追われた浜との伝説が残る。追浜航空隊の偉い人が「追われる浜」では縁起が悪いとして「追浜(おっぱま)」とした、ともいわれる。由来は定かでないが、いずれにしても海軍航空隊の発祥の地として名が全国に有名になったようだ。

※ 鉦切の蒲谷姓について

鉦切地区の住民の殆どが蒲谷の姓を名乗っていたのは、平兵衛が蒲ノ冠者の「蒲」を許され、これにやぐらの谷を加えたものだと伝えられる。

★ 正禅寺はその鉦切の中心にあり、蒲谷家の菩提寺であります。

★ 鉦切には昭和3年(1928)頃まで戸数360戸の民家があり、その内蒲谷姓が300戸近くにのぼっていた。

当時の鉦切は浦郷地区では一番大きな地域であった。

※ 鉦切の強制立退きについて

その後鉦切は年々海軍航空隊、海軍航空廠の拡張による、強制立退き命令により昭和5年(1930)頃から昭和19年(1944)にかけて300戸以上の民家が順次強制立退き命令により、他の地域に移転して行った。

そして終戦まで残ったのは、正禅寺とその周辺の民家数軒のみとなった。

※ 正禅寺の向かい側には神明社(寛文12年(1672)創建)という神社があった。

神明社は鉦切の鎮守として航海安全、大漁祈願の神様として信仰された。

神社も民家の移転と共に、現在地の正禅寺斜め裏の権現山に移された。

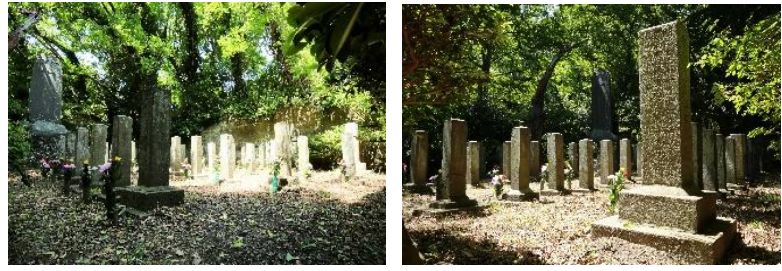
現在も「鉦切会」の皆様がお参りをしています。

戦後の鉦切

※ 昭和25年(1950) 鉦切の住民は新規発足した深浦町内会に入会した。

※ 昭和26年(1951) 横須賀市浦郷地区(現在の追浜行政センター管内)は町界地番整理がおこなわれ、鉦切は横須賀市浦郷町4丁目、5丁目の一部、夏島町に分割変更された。

## ⑤ 官修墓地に就いて



所在地

横須賀市浦郷町3丁目60番地

市道船越鉦切線追浜トンネル深浦側入口の左側の階段を上って、右折し狭い階段を100m程、登った右側の台地。（追浜トンネルの上）

★ 横須賀市市政施行70周年記念の横須賀風物百選に選定されている。

経緯

- ※ 明治10年(1877) 2月 西南の役が九州にて開戦し、明治政府（内務省警視局）は東北、関東地方の廃藩置県で失業した多くの士族を警察官として採用。この四十八士も徴募に応じた勇士であって、陸軍で訓練を受けた後、「新選旅団」所属の兵士として西郷隆盛らの反乱鎮圧のため転戦した。9月24日、鹿児島県の城山に於いて西郷隆盛以下が戦死して西南の役は終結した。 10月初頭、従軍の兵士は勲功を胸に意気揚々と海路東京に向け帰還の途についた。しかし途中船内に発生したコレラに感染し、悪化する一方で東京湾に入るも政府は伝染病を恐れて入京を禁じ、横須賀箱崎沖に停泊させ一切社会と隔離し、僅か1か月足らずのうちに故郷は遠く、近親者にも会えないまま48柱の死没者を出したため、鉦切の海浜の黒崎（アイクル付近）で荼毘に附し埋葬された。政府は官修墓地として国費で監守者を常置し、修繕料を交付し、毎年春秋2回県庁、郡役所より関係者を派遣し、お盆には香華を供えて丁重に慰霊し管理した。 深浦、鉦切の村民は線香を手向け花を供えて弔った。
- ※ 大正2年(1913) 官修墓地は海軍航空隊開設のため現在地に移葬された。
- ※ 昭和2年(1927) 墓地の大改修を加えた折、遺族を調べたが、1基「24番片岡茂太氏」の他には分からなかった。50年経過したから分からないのか、もともと遺族のない方が、この横須賀の地に葬られたのか不明である。
- ※ 昭和8年(1933) 10月18日 西南の役戦病者慰霊の「義勇千秋義烈満古」碑を建立する。 撰北村包直。 相陽時事新聞社、横須賀老兵会建立。
- ※ 昭和36年(1961) 10月 墓地の管理を国から横須賀市に移管された。

政府埋葬以来、政府官修墓地として管理してきたが、終戦をもってこれを打切ったため「農洋会」により祭祀および管理の復活を国会に請願する運動を続けた結果、国より横須賀市に墓地の管理を委託する決定があった。

※ 昭和40年(1965) 漢詩「想国土」の碑が建立された。 自然石で、台石は御影石  
深浦在住の社団法人ガールスカウト日本連盟顧問の吉原はる氏（春蘭と号す）により碑が建立された。

戦後吉原はる氏により結成されたガールスカウト第32団により供養、除草、清掃活動が始まる。 昭和50年に解団するまで行われた。

その後深浦町内会が、供養、除草、清掃活動を継続している。

※ 同年 7月 案内碑建立 市道船越鉦切線追浜トンネル深浦側入口左

黒御影石 台はコンクリート造円型

碑文 正面 西南役殉國者官修墳墓四十八基

左側面 官修墳墓監守人 蒲谷彦蔵、

深浦婦人会会長 渡戸スズ、

農洋会会長 大岩義一、

※ 昭和50年(1975) 5月 横山和夫横須賀市長は墓地にみえ、厳かに慰霊祭が行われた。

その折、千葉県銚子から大内恭平氏（元銚子市長）が見えられた。

聞くと、「10番大内昌氏」は恭平氏の曾祖父に当たるとのこと。

銚子にある墓には、「大内昌、32才、相州浦郷村に葬る」と記してある。

6年前より横須賀を訪ね、以後48勇士の遺族代表として毎年先祖の霊を慰めておられるとのこと。 まことに崇高な姿に心うたれた。

以後毎年5月 横須賀市の主催で市関係者、北郷仏教界（独園寺住職代表幹事）、深浦町内会らが慰霊祭を行っていました。

※ 平成9年(1997) 横須賀市が予算削減のため市主催の慰霊祭を中止したので、市に代わって深浦町内会と追浜連合町内会の共催で墓前祭を行いました。  
以後毎年共催で墓前祭を行っている。

★ 尚、官修墓地の管理部局は「横須賀市健康部健康総務課」が担当

※ 平成19年(2007) 5月19日 墓前祭

銚子の大内恭平氏が平成9年市主催の慰霊祭中止後、久しぶりに深浦町内会からの墓前祭の案内を受けて墓前祭に参列しました。

以後毎年長男の一恭氏と参列しています。

※ 同年 48勇士を管理している、警視庁の担当係官らが墓前祭に初めて参列しま

した。

警視庁では、別に毎年7月お盆の時期に墓地の清掃と献花を行っていることを町内会が知り、5月に合同墓前祭参列を要請し、以後毎年担当部署の総務部企画課庶務係の係官（責任者警部）が参列し献花を供えています。

※ 同年11月12日 警視庁OBの方々に組織しています「警察政策学会 警察史研究部会」の戸高公德氏、白井良雄氏、齋藤眞康氏の3氏が官修墓地にお見えになり、町内会で案内をしてから以後、毎回墓前祭に参列しています。

※ 平成27年(2015) 5月10日 墓前祭

新たな遺族が判明し、墓前祭に参列しました。

榊原謙齋（48勇士 新潟県士族 新選旅団所属 明治10年10月29日没）の曾孫で長野県在住の榊原好恭氏兄弟4名で、138年ぶりに墓参のため深浦を訪ねる。

墓前祭に参列している遺族は、大内氏と榊原氏の2家族となりました。

※ 平成28年(2016) 5月14日 墓前祭

前年参列した榊原謙齋氏の遺族榊原好恭氏が榊原謙齋氏の戦地より家族に宛てた8通の書状を冊子にまとめたものを持参し、「戦争はむなしい行為と先祖の視点で伝えたかった」と子孫が平和への思いを報告した。

※ 令和2年(2020) 5月9日 墓前祭中止

新型コロナウイルス感染予防のため、墓前祭は中止となりました。

但し、深浦町内会のみで墓地の草刈りと清掃の後、線香を供えて丁重に慰霊した。

※ 令和4年(2022) 5月14日 コロナの中深浦町内会で墓前祭開催

遺族の大内一恭氏、警視庁係官、追浜連合町内会会長、副会長、追浜行政センター館長、副館長、担当職員、深浦町内会役員、地域の方々が参加しました。

※ 令和6年(2024) 2月18日 深浦町内会に対し横須賀市 上地克明市長より文化財に対し貢献したことで、表彰状が横須賀市制記念日の席上で贈られた。「長年にわたり文化活動の振興及び市民文化の発展に尽力されました」との理由であります。

※ 令和6年(2024) 6月5日 深浦町内会に対し東京警視庁 緒方禎巳警視総監より感謝状が贈呈された。 授与式は、追浜行政センターにて警視総監

の名代として、来られた森元良幸副総監より授与されました。

「貴会は長年にわたり浦郷官修墓地の墓前祭を実施し警視庁職員の御霊

の供養に多大な貢献をされました。ここに深く感謝の意を表します」と記してあります。

※ 令和9年(2027) 官修墓地埋葬150周年を迎える。

## ⑥ 夏島貝塚に就いて

所在地 横須賀市夏島町2丁目 日産自動車追浜工場内

※ 明治13年(1880) 旧夏島は浦郷村字鉈切の附属地で鉈切住民の共有地であったが、官有地として陸軍省が買収した。その後埋立てにより陸続きとなり海軍航空隊の飛行場となった。

※ 昭和25年(1950) 明治大学により、2回の発掘調査の結果、今から約9,500年前のものだと判明し、当時としては世界最古の貝塚であったという。

※ 昭和34年(1959) 米国シガン大学での夏島貝塚から出土したカキの貝殻に対し放射性炭素測定法による年代測定で9,450年前に前後400年との年代、木炭は9,240年前に前後500年の年代との測定値が得られた。

※ 昭和47年(1972) 国の文化財に指定され全国的になり、追浜駅から日産方面の道路も「夏島貝塚通り」の名となった。

※ 平成10年(1998) 6月「夏島貝塚出土品(一括)」国の重要文化財(考古資料)に指定される。(明治大学他保管)

※ 夏島人は、波静かで浦々の入り江の多い冬暖かなこの地が、海の幸、山の幸に恵まれて、獣を捕えるのに弓矢を使い、魚を獲るのに独木舟を作り、銚、釣針等は夫々獲物に適した道具を考案し、改良した。

※ 貝塚から出土した遺物より、山野で猪、鹿、狸、兎、各種の鳥を捕獲し、自然の植物を採取し、岸辺でマテガイ、ハマグリ、アサリ、ハガイ、カキ等の貝を捕り、各種の魚類を獲え、住居は貝塚周辺に竪穴式住居を造って生活し、縄文時代草創期の土器を作って食生活を充実して、自然採集中心の生活より漁撈を重要な生活手段として安定した食生活を図った。

よって、浦郷ははるか遠い昔からの歴史を持つ夏島貝塚の存在は大変重要である。

※ 夏島貝塚の対岸に野島貝塚(縄文時代早期7,000年前)や、南に榎戸貝塚(縄文時代後期3,500年前)がある。

※ やがて、地球の変動に依り、湿地化し、平地となって農耕技術が伝来すると、夏島

- 人の生活は、自然採集の移行型から農耕へと移って、定着した生活に変化した。
- ※ 鉞切には鉞切貝塚遺跡が発見、調査されて弥生式土器や、奈良、平安期の土師、骨製品、牛を生贄にした祭祀遺跡、ド代瓦、ト骨、製塩跡等の遺物が多数出土している。
  - ※ これらの古墳時代後期から奈良時代の頃には、御浦郡（追浜から長浦、逸見付近の地域）と呼ばれた「ムラ」であったと思われる。
  - ※ 御浦郡の中心は多数の遺跡がある「鉞切」ではないかと思われ、この地で生活をした人々を葬ったのは鉞切やぐら群（20数穴）であり、横穴古墳があることはこの周辺に集落「ムラ」が存在した事を証明している。
  - ※ 居住跡は未だ発見されない。
  - ※ 独園寺には室町時代と思われる「やぐら群」（7～8穴）がある。
  - ※ 付近には、天神和田山やぐら群（35穴）、観音寺下（1穴）、田川公園南崖（4穴）等の横穴があり、御浦郡の存在を示す唯一の貴重な証拠物証遺跡である。

## ⑦ 明治憲法起草遺跡記念碑



- ※ 大正15年(1926) 11月 伊藤巳代治や金子堅太郎らが発起人となり建てた碑である。
- 碑は夏島貝塚通りを直進し京急バス追浜車庫を左折し、日産自動車追浜工場の右側に隣接した夏島の手前にある。
- 碑は76個の御影石は明治憲法76条を示していて、飛行機の発着の妨げにならぬようにと低く配慮し建立されたという。
- ※ 昭和26年(1951) 2月 最初に建立したものが荒廃したため、復興作業をした。
- ※ 昭和50年(1975) 4月 日産自動車追浜工場建設のため、設置場所より200mの現在地に移設された。
- ※ 平成元年(1989) 3月 横須賀市の市民文化資産に指定される。
- ※ 明治20年(1887) 6月 伊藤博文は憲法の草案を練るため夏島に別荘を建てた。

伊藤博文がこの地を選んだのは、青年時代に見た金沢の風景が忘れ得なかったことと、自由民権派から逃れ、密かに草案起草を進める必要があったため、東京に近く、しかも人に知られていないこの地が相応しいと考えたからである。 発起人である井上毅は野島館、伊藤巳代治と金子堅太郎は東屋旅館に宿泊し、小舟で毎日往復したという。 作業は午前中であったが、雑談中でも話題が憲法に及ぶと、しばしば議論となったという。 東屋は安藤広重が宿泊した際「金沢八景」と題して描いた旅館であり、今の瀬戸橋際にあった。 草案が完成すると、伊藤博文は別荘を大磯の滄浪閣に移し、明治21年(1888)8月 夏島は砲台建設が進められたのである。

★ 明治憲法について

明治22年(1889) 2月 公布 明治23年(1890) 施行された日本の憲法。

大日本帝国憲法と言い、略して「帝国憲法」、明治に発布されたことから俗称「明治憲法」とも。 現行の憲法との対比で「旧憲法」とも呼ばれる。

⑧ 予科練誕生之地碑



※ 昭和56年(1981) 6月予科練誕生之地 碑が建立され除幕式が挙行された。

その学び舎の後である貝塚緑地の丘に、生存者たちによって記念碑が建てられた。

その2年後の昭和58年(1983) 4月 そこに貝山緑地公園が開設された。 緑地の一部は自然教材園となり、「杏の里」という杏の花が咲き、実がなる公園となっている。

この辺は、戦後工場地帯と化したのが、終戦までは海軍追浜航空隊が置かれていた地である。 明治末から追浜海岸が埋立てられ、沖合の夏島を陸続きにし、広大な飛行場が造られた。

★ 予科練習部について

※ 大正5年(1916) 4月 には海軍航空隊が生まれ、昭和に入ると「月月火水木金金」という言葉を生むほど、飛行隊員は日夜、猛訓練が展開された。

※ ライト兄弟の人類初の飛行から9年後の大正元年(1912) 11月わが国初の水上飛行に成功したのが、実はこの地である。

※ 昭和5年(1930) 6月 日本で初めての予科練習部が併設され、全国の志願者から79名の少年たちが厳選され、若い血潮の「予科練」と呼ぶ飛行練習生が誕生し、茨城県霞ヶ浦の湖畔に移るまでの8年9ヶ月間、その教育が行われたのである。

※ 昭和14年(1939) 3月 予科練を横須賀航空隊から霞ヶ浦航空隊(茨城県阿見町)に移す。

★ 当時予科練習生だった深浦在住「佐藤重雄氏(元深浦柏樹会々長)」の話。  
「出身は秋田で、昭和9年に5期生の練習生として応募しました。集まったのは全国から7,589人で入ったのは200人、(37.9倍)あの頃は全国の中学生在が3年生になると、お前は予科練を受けろ、お前は陸軍戦車学校だって、と先生がよく言ったもんですよ。そして、卒業は昭和11年3月か4月だった。2月に2,26事件がおきて雪の降る中、完全武装して半日位待機しましたよ。卒業時の位は二等航空兵でした。」とのことであった。

⑨ 昭和天皇行幸之碑



※ 昭和13年(1938) 11月に造立された。

「旧海軍航空技術廠本庁舎」(現シンジーテック株式会社工場) 庭内跡に、昭和天皇が同年8月、海軍航空技術廠を視察行幸された記念碑「昭和天皇行幸之碑」が立つ。

※ 昭和天皇行幸之碑 は横須賀市内唯一のものである。

★ 海軍航空技術廠とは。

※ 昭和7年(1932) 3月 深浦湾に面した浦郷の陸地一帯に日本の航空技術の総合

研究開発機関として海軍航空廠（後 海軍航空技術廠）が設置された。

ここに優秀な人材が集まり、航空機に関する先端技術の研究が行われた。

周辺地には貝山を挟んで、海軍横須賀航空隊、陸上飛行場や予科練生

の校舎が出来ていた。海軍航空廠の技術者が航空機の開発を行い、

ベテランパイロット集団も飛行訓練を繰り返した追浜は、航空基地の最適

地とされたのである。よって「追浜」という地名が全国に知れ渡ったので

ある。終戦時には職員1700人を含む37,000人が働いていた。

ここから誕生した飛行機は、「ゼロ戦」、高性能艦上爆撃機「彗星」、双発

陸上爆撃機「銀河」、ジェット機「立花」、ロケット機「秋月」、B29迎撃用

ロケット「噴流」、特攻機「桜花」、などがある。

ここでの技術は終戦後、産業界で多方面に渡り影響を与え、「ゼロ戦」の

改良をした松平精技師、「銀河」を設計した三木忠直技師は共に鉄道技

術研究所（現 鉄道総合技術研究所）の技術者となり、航空技術をいかし

て初代東海道新幹線車両などの開発、設計をした。

井深大氏、森田昭夫氏は金沢支廠で出会い、後にソニーを創設している。

※ 昭和20年(1945) 8月 終戦とともに米国進駐軍に海軍航空技術廠、海軍航空

隊飛行場等の追浜地域の軍需施設全域が接収される。

※ 昭和24年(1949) 10月 米軍より海軍技術工廠敷地は日本政府に返還される。

その後、平和産業都市への転換が図られ、多くの企業が進出した。

※ 昭和37年(1962) 6月 北辰工業株式会社が（現シンジーテック（株））設立され

「旧海軍航空技術廠本庁舎」の建物等で業務を開始した。

※ 平成16年(2004) 12月 老朽化のため、旧海軍航空技術廠本庁舎は解体撤去され、

その跡地に「海軍航空技術廠本庁舎跡」の案内板が碑と共にある。

★ 今も深浦に残されている海軍航空技術廠関連の施設を紹介します。

追浜トンネルに接していた水上機試験水槽（240<sup>坪</sup>）を100<sup>坪</sup>延伸させる

ため、道路をまたいだ橋状構造物は健在である。

航空技術廠深浦門入口には、現在東邦化学の施設で旧 風洞準備室らし

い建物が残っている。また同じく東邦化学が使用している施設には試験

水槽の関連施設らしき建物がある。ツタの葉で覆われ、年代を感じさせ

ている。現日本和紡は発動機部の旧 第4研究所を使用している。

### Ⅲ 深浦の（追浜一部含む）歴史年表

#### 原始・古代編

年号	出来事
縄文時代早期 (約9500年前)	「夏島貝塚」 現在の夏島町2丁目に所在。 貝塚は標高46m西側頂上付近と島の中央部に所在する。 夏島貝塚は国内最古級の貴重な貝塚である。(国指定史跡) 夏島貝塚の旧所在地は三浦郡浦郷村字鉦切地内であった。
縄文時代中期 (約4500年前)	「正禅寺裏山遺跡」 鉦切(浦郷町4丁目)に所在。 正禅寺裏の丘陵上に立地し、縄文時代中期の土器片および石鏃が採取されている。現在は畑地である。
弥生時代後期 (2世紀～3世紀)	「鉦切遺跡」 浦郷町4丁目から夏島町にかけての砂丘一帯に広がる海浜の遺跡。
古墳時代早期 (3世紀後半)	「東鉦切遺跡」 浦郷町4丁目～浦郷町5丁目に所在した。 山中の低砂地に立地する古墳時代から平安時代の遺物散布地・遺物・貝塚。正禅寺山門脇に古墳時代前期の貝塚がある。オカムラの工場敷地部分造成工事中和泉期の壺型土器と共に、白玉などが出土している。
古墳時代後期～終末期 (6世紀～7世紀)	「西鉦切遺跡」 浦郷町4丁目に所在した。 丘陵中段平坦地に立地する古墳時代の遺物散布地。日産自動車の社員寮造成工事中に古墳時代の土器などが出土している。現在は寮の敷地で、造成工事でほぼ消滅した。 「鉦切遺跡」 浦郷町4丁目から夏島町にかけて所在する。 古墳時代後期の祭祀遺構が良好な形で検出された遺跡。 「鉦切横穴墓群」 浦郷町5丁目に所在した。 東鉦切集落の裏山に所在した「範頼ヤグラ」伝承する横穴群で、28穴が確認されている。戦時中に取崩され消滅した。
平安時代 (9世紀～12世紀)	「鉦切遺跡」 浦郷町4丁目～夏島町に所在する。 この期の遺構・遺物は汀線に近い地点を中心に検出されている。
浦郷町のその他遺跡 縄文時代中期 弥生時代後期 平安時代	「榎戸貝塚」 浦郷町2丁目能永寺境内に所在する。 「八王子社裏遺跡」 浦郷町1丁目に所在する。 「日向遺跡」 浦郷町1丁目に所在する。
中世編	
年号	出来事
明德年間 (1390年～1394年)	この頃、本浦・自得寺(臨済宗)開創される。
応永元年 (1394年頃)	この頃、榎戸・能永寺(時宗)開創される。
応永年間 (1394年～1428年)	この頃、本浦・良心寺(浄土宗)開創される。
明応3年 (1494年)	本浦・法福寺(日蓮宗)開創される。
大永年間 (1521年～1528年)	暘谷幹愷、正禅寺(臨済宗)を開基創建する。 なお、正禅寺の開創は慶長年間(1596～1615)の伝もあり。
元和5年 (1619年)	10月 一峰玄存、独園寺(臨済宗)を開創される。
寛永3年 (1625年)	深浦の鎮守 大国主社が創建される。
寛永12年 (1635年)	10月 深浦・稲荷社が創建される。
寛文12年 (1672年)	6月 深浦・亀島社が創建される。 9月 鉦切・伊勢神明社が創建される。

貞享4年 (1687年)	1月	深浦 (現追浜東町)・観音寺が創建される。
元禄13年 (1700年)	10月	深浦・石渡五郎右衛門、独園寺に半鐘を寄進する。
享保3年 (1718年)		鉦切・正禅寺本堂が建立されたと伝える。
享保10年 (1725年)		観音寺の境内入り口に、「三浦廿二番坂中観音」の石標を建立。
享保19年 (1734年)	6月	鉦切・正禅寺の木造不動明王・毘沙門天像が彩色修理される。
宝暦12年 (1762年)	4月	観音寺の檀徒、喚鐘を新鑄して寄進する。
文化3年 (1806年)	6月	観音寺の鰐口を亀松屋弥治兵衛が寄進する。
嘉永6年 (1853年)	6月3日	アメリカ ベリー艦隊浦賀沖に来航する。
	6月11日	ベリー艦隊、夏島沖に停泊して近海を測量する。
万延元年 (1860年)	4月	独園寺の木造愛染明王像が造立される。
元治元年 (1864年)	7月	正禅寺に蒲谷政右衛門外2名が、半鐘を寄進する。

### 明治から現在まで

年号	出来事		
明治元年 (1868年)	徳川幕府の大政奉還		
	9月 神奈川県は神奈川県と改称される。神奈川県スタートである。		
明治3年 (1870年)	鉦切・正禅寺塾が開かれる。		
明治4年 (1871年)	鉦切で蒲谷新田の開発工事に着手する。		
明治6年 (1873年)	4月 太政官布告により、正禅寺塾を北浦学舎と改称、開校される。 他に本浦学舎・南浦学舎がある。		
明治7年 (1874年)	4月 北浦・南浦・本村各学舎を廃止、自得寺を仮校舎として、名称を第1大学区 第10中学区第55小学本浦学舎と改称する。 現浦郷小学校の創立である。		
明治8年 (1875年)	10月 第55小学本浦学舎を第55小学浦郷学校と改称する。		
明治10年 (1877年)	3月 公立小学浦郷学校が狭溢につき、本浦313番地に校舎を新築される。 生徒数は男76名、女66人、教員3名である。		
	10月 西南戦争に従軍した警視庁兵士らが、凱旋途中コレラに感染し、浦郷の仮 病舎に収容、死亡者は48人を数えた。		
	12月 西南戦争戦病者埋葬地として、陸軍省は鉦切地区内の字矢浜の土地を借用。 翌年11年4月該地を官有地として買収、内務省が管理する。 現在の官修墓地である。		
明治11年 (1878年)	11月 三浦郡浦郷村深浦・鉦切となる。 郡区町村編制法施行で		
明治12年 (1879年)	大国主社に大神輿 深浦の約60戸の氏子で奉納された。		
明治13年 (1880年)	5月 夏島を官有地として陸軍省が買収。 同島は鉦切の人たちの所有で、全島 1,800円で売却したという。		
	12月 本浦地区が大火に見舞われ、民家65戸を焼失、小学浦郷学校や法福寺 なども類焼する。 学校は深浦観音寺に移転する。		
明治15年 (1882年)	9月 第55小学浦郷学校は村上浦郷学校と改称された。		
明治16年 (1883年)	11月 大国主社の社殿が再建された。		
明治20年 (1887年)	6月 伊藤博文の別荘が陸軍用地となった夏島に完成。伊東巳代治、金子堅太郎、 井上毅らと、憲法草案の起草・審議を行う。		
明治21年 (1888年)	4月 村上浦郷学校は、公立浦郷学校と改称された。		
明治22年 (1889年)	4月 町村制施行され、浦郷村・船越新田・田浦村・長浦村が合併し浦郷村となり、 旧浦郷村は「浦郷村大字浦郷」となる。 横須賀線 大船・横須賀間開通し、横須賀駅が開業した。		
明治26年 (1893年)	2月 公立浦郷学校は小学校令の改正により、神奈川県三浦郡浦郷村立 尋常浦郷小学校と改称された。		
明治27年 (1894年)	6月 日向 (浦郷町1丁目) に日向巡査駐在所が設置される。 浦郷村に消防組が設置される。		
明治32年 (1899年)	7月 政府は軍機保護法・要塞地帯法を公布。 浦郷村全域が要塞地帯に含まれる。		
明治37年 (1904年)	この年 横須賀線田浦駅が開業し深浦の最寄駅となる。		
明治40年 (1907年)	3月 小学校の義務教育年限の4か年を6か年に延長する。		
明治44年 (1911年)	深浦・亀島 (浦郷町5丁目) 周辺一帯が海軍より買収され、横須賀海軍 建築部深浦出張所が開設される。 深浦トンネル (深浦・追浜東町間) 竣工する。 独園寺住職世道泰嶺和尚が 手掘りて人と大八車が通れる高さ1.8m幅1.2mの素掘りのトンネルであった。		
	12月 「三浦郡浦郷村郷土誌」が発行される。 それによると、 明治43年の各字の人口		
	戸数	人口	
	深浦	117戸	673人
	鉦切	217戸	1,313人
	榎戸	161戸	922人
	日向	126戸	718人

		本浦	167戸	1,171人
		計	788戸	4,797人
明治45年 (1912年)	2月	追浜トンネル(深浦・鉦切間)が竣工する。当時は鉦切トンネルと命名されたが、昭和8年改修で追浜トンネルと改名した。		
	6月	尋常浦郷小学校が現在地に校舎新築、開校式を挙げる。この日を創立記念日とする。		
大正元年 (1912年)	9月	追浜での航空術研究のため格納庫及び事務所が竣工する。米国製複式水上飛行機2機到着する。		
	10月	追浜飛行場の誕生。海軍航空術研究委員会は追浜海岸に南北600m・東西200m地積を整理して海岸に滑走台を造る。		
大正2年 (1913年)	10月	西南の役兵士の墓碑を追浜海岸の黒崎より、現在地に改葬した。		
大正3年 (1914年)	6月	浦郷村、町制を施行。田浦町と改称し、役場を船越に置く。		
大正7年 (1918年)	6月	鉦切・神明社、同所の稲荷社、酒ノ宮両社を合併する。		
大正12年 (1923年)	4月	尋常浦郷小学校 田浦町浦郷尋常小学校と改称する。在籍児童899人。		
	9月	関東大震災。浦郷尋常小学校の神応・清水両校舎全壊、男児2名死亡、女児1名負傷。深浦、榎戸、日向の被害は、死者5名、家屋全壊25戸、半壊186戸と記録されている。		
大正13年 (1924年)		大国主社に海軍砲身及び砲架が奉納される。		
大正14年 (1925年)		現国道16号線浦郷トンネル(追浜・船越間)竣工する。		
昭和2年 (1927年)	5月	官修墓地荒廃のため改修を加える。		
	6月	現国道16号線本浦(現追浜町)から長浦田ノ浦まで竣工する。		
昭和3年 (1928年)	3月	深浦湾内の亀島は海軍に買い上げられ、亀島社は大国主社に合祀。亀島の旧姿は海軍航空廠を設置するための埋立てで消滅した。現国道16号線浦郷から逸見まで7つのトンネルで結ばれ開通。		
	4月	湘南電鉄 黄金町・浦賀間営業開始。追浜駅が誕生した。		
昭和5年 (1930年)	6月	横須賀海軍航空隊に飛行予科練習部を設置、第1期生79名の教育を開始する。(同14年3月茨城県霞ヶ浦に移転する。)		
	4月	田浦町が横須賀市に合併し横須賀市浦郷となる。当時の横須賀市の人口は15万825人。		
昭和8年 (1933年)	4月	浦郷尋常小学校は横須賀市立浦郷尋常小学校となる。尋常科23学級 在籍児童数1,407人となる。		
	4月	湘南電鉄 品川・浦賀間直通運転開始される。		
	10月	官修墓地に西南の役戦没者慰霊の「義勇千秋義烈満古」碑を建立する。撰北村包直。相陽時事新聞社・横須賀老兵会建立。		
	この年	深浦・榎戸間に榎戸トンネル、日向・梅田間に日向トンネル竣工する。現在の市道 船越鉦切線である。		
	3月	日向巡査駐在所を浦郷4349番地(現浦郷町2丁目)に新築移転し、榎戸巡査駐在所とした。		
昭和10年 (1935年)	4月	浦郷尋常小学校に高等科を付設、浦郷尋常高等小学校と改称。校舎(6教室)を増築する。在籍児童数2,051人という。		
	10月	浦郷郵便局(深浦)が開設される。		
昭和13年 (1938年)	8月	天皇陛下、深浦の海軍航空廠に行幸、作業状況を天覧する。		
	11月	天皇陛下行幸を記念して、航空廠敷地に「行幸碑」を建立する。		
昭和14年 (1939年)	3月	飛行予科練習生(予科練)を横須賀航空隊から霞ヶ浦航空隊(茨城県安見市)に移転した。		
	4月	深浦の海軍航空廠は海軍航空技術廠と改称される。		
	6月	横須賀海軍共済組合病院浦郷分院を閉鎖し、同病院追浜分院を新たに六浦瀬ヶ崎に新設開院する。		
昭和15年 (1940年)	12月	横須賀市町内会整備要綱が定められ、現追浜地区は追浜第一～第八、本追浜、深浦、榎戸、日向の11町内会となる。		
昭和16年 (1941年)	4月	国民学校令が公布され横須賀市浦郷国民学校となる。		
	4月	新たに横須賀市追浜国民学校(現追浜小学校)開校。浦郷小学校から964名、船越小学校から159名児童合計1,123名で発足。		
	4月	横須賀海軍共済組合病院追浜分院を追浜海軍共済病院として独立。昭和20年10月財団法人共済協会追浜共済病院となり、同40年4月横浜南共済病院と改称し現在に至る。		
	4月	獨園寺の墓地の一部が海軍航空技術廠水上機試験水槽2基建造のため、強制退去命令が発令、緊急移転を余儀なくされた。移転先は南側(現在の山上墓地)で、ここに墓地を新設した。		
	11月	京浜電鉄、湘南電鉄、湘南半島自動車が合併、「京浜電気鉄道」となる。		

	12月	米英両国に宣戦布告。真珠湾攻撃により太平洋戦争開戦。
昭和18年 (1943年)	2月	独園寺半鐘が金属回収令により供出する。戦後解体されずに返却される。
昭和19年 (1944年)	2月	この頃鉦切・深浦・榎戸・日向で引き続き民家の強制疎開が、行われる。鉦切は正禪寺と民家7軒を残すだけとなった。
	8月	学校疎開のため浦郷国民学校の児童345名が高座郡小出村に出発する。
	8月	浦郷小学校校舎が航技廠に動員された仙台・宮城高女性たちや、海軍高射砲隊隊員などの宿舎として終戦まで使用される。
昭和20年 (1945年)	7月	追浜飛行場が米空母「バターン」の戦闘機隊によって、爆撃を受ける。
	8月	戦争終結の詔書が放送される。
	8月	連合軍(アメリカ軍)が横須賀海軍航空隊追浜飛行場に進駐。
	10月	浦郷国民学校児童、集団疎開から帰る。
	10月	追浜海軍共済組合病院が追浜共済病院と改称し、一般市民の診療開始。
昭和21年 (1946年)	3月	湘南国際病院が元海軍航技廠の技術将校宿舎(現在地)に開院。
	4月	浦郷国民学校を浦郷小学校と改称する。
	11月	浦郷町5丁目 日協低温(株)が設立される。
昭和22年 (1947年)	3月	浦郷町3丁目 光工業(株)が設立される。
	3月	昭和15年に定められた町内会は、訓令により廃止される。
	4月	新制中学校が発足し、5月に浦郷中学校が浦郷小学校内に開校する。
	10月	横須賀市消防団条例が施行され、深浦に第10分団がおかれる。
	12月	浦郷中学校を廃止し、田浦中学校を現在地に開校する。
昭和23年 (1948年)	12月	浦郷町5丁目 日本和紡興業(株)が設立される。
	5月	横須賀市役所浦郷支所が設置される。旧田浦憲兵分遣隊跡に。
	5月	追浜工業会が結成される。
	6月	鉦切遺跡(古墳時代)の発掘調査が開始される。
昭和24年 (1949年)	8月	米陸軍特需会社の富士自動車(株)が横須賀海軍航空隊跡地に進出、昭和33年までに再生した米軍車両はのべ22万9千台に及ぶ。
	4月	追浜運動公園(夏島町)開設される。
	7月	石渡直次(深浦)第20代横須賀市長に就任する。
昭和25年 (1950年)	11月	追浜総合運動場の硬式野球場(現横須賀スタジアム)開業式。プロ野球東急対太陽の公式試合を招いて盛大に挙行された。
	1月	深浦町内会が発足される。石渡徳次郎 初代会長に就任。戦前からの町内会は同22年廃止され、新組織として発足。
	3月	夏島貝塚(縄文時代早期)の第1回発掘調査が行われる。
	6月	「旧軍港市転換法」が公布・施行され、旧軍港市の平和産業港湾都市へと転換が図られるようになる。主な目的は国有財産の払下げに伴う特別処置で、よって現浦郷町5丁目・夏島町に多くの企業が進出した。
	9月	浦郷町3丁目 太陽商事(株)が設立される。
昭和26年 (1951年)	11月	浦郷町5丁目 京浜発條(株)が設立される。
	4月	浦郷の町名町界地番整理を実施。その結果横須賀市浦郷は浦郷町・夏島町・追浜町・追浜南町・追浜東町・追浜本町・鷹取町に分割。深浦は浦郷町3丁目と5丁目・2丁目・追浜東町の一部に分割変更。鉦切は浦郷町4丁目と5丁目・夏島町の一部に分割変更になった。日向は浦郷町1丁目、榎戸は浦郷町2丁目にそれぞれ変更になった。
	7月	大國主社に山車(屋台)が新調された。新調の采配は白井若次で、氏子各位の寄進により約15万円を要した。当時の氏子総代は石渡万之助で製作者は馬堀の宮大工岩沢大吉。
昭和27年 (1952年)	8月	鉦切正禪寺境内に「大東亜戦争戦死者慰霊塔」が建立される。
	12月	国道31号は新しく一級国道16号線となる。
昭和28年 (1953年)	8月	追浜地区社会福祉協議会が設立される。
昭和29年 (1954年)	2月	追浜ヘリコプター基地(現追浜中学校周辺)再接収される。
	7月	県立横須賀公共職業補導所(浦郷町4丁目31番地)が設置される。その後、昭和38年に県立追浜職業訓練所となる。
	11月	浦郷小学校創立80周年式典を行った。在籍児童1,005人、19学級
昭和30年 (1955年)	3月	深浦独園寺境内に「大東亜戦争戦死者慰霊塔」が建立される。
	6月	夏島貝塚(縄文時代早期)の第2回発掘調査が行われる。
	6月	雷神社社殿(追浜本町)が焼失する。
	11月	浦郷小学校分校(浦郷町4丁目)開校する。後の夏島小学校になる。
昭和32年 (1957年)	1月	官修墓地は戦後国がその維持管理を打切ったため、「深浦にある官修墓地の祭祀及管理の復活に関する請願書」が農洋会によって

	国会に提出された。
	12月 横浜商工高校(現横浜創学館高校)が現在地の旧海軍兵舎に横浜市鶴見区より移転開校した。
	12月 雷神社社殿(RC構造)が再建される。
昭和33年(1958年)	6月 浦郷町5丁目(株)岡村製作所 現(株)オカムラ 操業を開始する。
	10月 深浦地先(現深浦町内会館前)横須賀市が816㎡を埋立する。
昭和35年(1960年)	2月 日産自動車(株)、夏島町に進出する。
	4月 夏島小学校(浦郷小学校分校)、独立し開校する。
	4月 田浦中学校分校(夏島町 後の追浜中学校)が設置される。
	4月 浦郷町5丁目 イシカワ製作所(株)が開設される。
	10月 浦郷町5丁目 東邦化学工業(株) 追浜工場が開設される。
昭和36年(1961年)	3月 国道16号線新浦郷トンネル(追浜町・船越町間)が竣工する。
	4月 追浜中学校(田浦中学校分校)が独立して開校する。
	4月 浦郷町5丁目 日神機工(株)が開立される。
	6月 浦郷町3丁目 追浜プレス企業組合が開立される。
昭和37年(1962年)	3月 日産自動車(株) 追浜工場が竣工し、全面操業稼働に入る。
	6月 浦郷町5丁目(株)青木製作所追浜工場が開立される。
	6月 浦郷町5丁目 北辰工業(株) 現シンジータック(株) 旧海軍航空技術廠 庁舎の払下げを受ける。 尚、操業開始は昭和39年2月。
	11月 官修墓地は国より無償貸付けとなり、横須賀市に管理を委託される。
	11月 深浦柏樹会(老人会)が発足される。初代会長吉原ハル就任する。
昭和38年(1963年)	4月 榎戸巡査駐在所を浦郷町駐在所と改称する。
	4月 県立追浜高等学校が開校する。第1回生501名が入学。
	8月 追浜駅前に追浜ショッピングセンターが完成した。
	10月 浦郷町3丁目(株)瀧澤鋳機製作所が開立される。
昭和39年(1964年)	10月 横須賀市浦郷支所を追浜支所と改称する。
	10月 東京オリンピックが開催された。
昭和44年(1969年)	3月 西武鉄道(株) 湘南鷹取分譲地、第1期426戸分を売り出す。
	4月 市営深浦改良アパートが建設工事竣工した。75戸が入居し深浦町内会に。
	9月 浦郷町5丁目 夏島運輸(株)が開立される。
	10月 県立追浜職業訓練所、追浜専修職業訓練校と改称される。
	11月 追浜電話交換局が(追浜東町3丁目)開局により追浜地区の局番 61局から65局に変更になる。
	11月 夏島小学校、創立10周年記念式典を挙げる。
昭和46年(1971年)	6月 住友重機械工業(株) 追浜造船所が発足した。12月に操業開始する。
昭和47年(1972年)	1月 「夏島貝塚」が国指定史跡となる。
	5月 浦郷町駐在所を榎戸から現在地の日向に新築移転する。
	11月 追浜駅の橋上駅舎が完成し、営業開始する。
昭和48年(1973年)	4月 横須賀市追浜支所を追浜行政センターと改称、公民館と共に開館する。
	6月 追浜観光協会が開立される。
	10月 海洋科学技術センターが開所式を挙げる。
昭和49年(1974年)	6月 浦郷小学校、創立100周年の式典を挙げる。
	浦郷商店会が発足する。
昭和54年(1979年)	11月 夏島小学校、創立20周年記念式典を挙げる。
	鉾切遺跡(古墳時代)を発掘調査、さらに同58年にも再調査。
昭和56年(1981年)	5月 第一勧業銀行追浜支店(現みずほ銀行)が開業する。
	6月 「予科練誕生の地」碑が、貝山緑地に建立される。
昭和58年(1983年)	4月 貝山緑地公園(浦郷町5丁目)が開設される。
	12月 田川誠一衆議院議員(日向)、自治大臣、国家公安委員長に就任。
昭和60年(1985年)	1月 横須賀市追浜文化センターが開館する。市立北部図書館も併設。
	10月 追浜駅前第1街区市街地再開発ビル、「サンビーチ追浜店」開店。「西友」「ヨコサン」等が入店した。
昭和64年(1989年) 平成元年	1月 昭和天皇は1月7日皇居・吹上御所で崩御された。87歳。 1月8日 皇太子明仁親王陛下が天皇に即位された。 「昭和」から新元号は「平成」に改まった。
	5月 深浦町内会館が旧会館(現おかむら寿司)より現在地に新築移転して開館記念式典を挙げる。 会館建築費 2千万円 資金は(市からの補助金450万円 新井組(株)からの寄付金 1千万円・おかむら寿司50万円

		町内会及び柏樹会負担 500万円) 土地は市から賃借契約 会館内の什器備品代金 200万円 (町内の方々の寄進)
	8月	市立北部体育館が完成し、落成式を挙げる。
平成3年 (1991年)	9月	三浦信用金庫と藤沢信用金庫が合併し、「三浦藤沢信用金庫」と改称した。
平成5年 (1993年)	11月	県立追浜高等学校、創立30周年記念式を挙げる。
平成6年 (1994年)	4月	追浜行政センターが現在地に新築移転し、開館する。 旧追浜行政センターを追浜行政センター分館とした。
平成9年 (1997年)	3月	追浜球場の愛称が「横須賀スタジアム」に決定する。
	3月	深浦町内会館前市港湾部の「浦郷みなと緑地」埋立完成する。
平成11年 (1999年)	7月	京浜急行のダイヤ改正で、追浜駅がラッシュ時を除き普通車だけの 停車駅となる。
平成12年 (2000年)	2月	夏島貝塚発掘調査50周年記念の遺跡見学会が行われる。
	7月	関東自動車 (株) 深浦工場閉鎖される。39年間の操業であった。
	11月	「第1回日産カップ車椅子マラソン2000」が開催される。
平成13年 (2001年)	3月	「横須賀リサイクルプラザ」(愛称アィクル) が落成式挙げる。
平成14年 (2002年)	4月	第一勧業銀行追浜支店は、みずほ銀行追浜支店と改称する。
	5月	(有) 坂庭資源開発、深浦に事業所移転し、業務開始する。
	11月	市営サービス工房「役所屋追浜店」がサンビーチ追浜店に開設される。
平成15年 (2003年)	12月	大国主社社殿耐震化改修工事完成し、落成式が挙行される。 屋根を瓦葺きから銅板葺きに葺き替え・本殿内外装を改装し、石灯籠も 新設、鳥居も塗り替えした。
平成16年 (2004年)	4月	「海洋科学技術センター」が解散し、同時に独立行政法人「海洋研究 開発機構」が発足する。 同27年に国立研究法人となる。
	4月	浦郷町5丁目 (株) 菱食 現三菱食品 物流センター設立される。
	12月	旧海軍航空技術廠本庁舎 (現シンジーテック (株)) が解体撤去された 跡地に「海軍航空技術廠本庁舎跡地」の碑が建立される。
平成17年 (2005年)	12月	浦郷町5丁目 (株) マルコが竣工し操業開始した。
平成18年 (2006年)	4月	浦郷町5丁目 (株) 東京ガス横須賀パワーが竣工し発電開始する。
平成19年 (2007年)	4月	市営深浦ポートパークが開業する。
平成20年 (2008年)	2月	「山之脇トンネル」(浦郷町3丁目～4丁目間) が竣工する。 マンション「ルネ追浜」建設に伴い建設したもの。
	3月	県立横須賀高等職業技術校が閉校する。 後、敷地は民間住宅建設 会社に売却され60戸の戸建て住宅が建設された。
	7月	雷神社の天王祭で宮神輿の渡御が47年ぶりに復活した。
平成21年 (2009年)	1月	追浜駅前のサンビーチ追浜の「西友追浜店」が閉店、撤退した。
	4月	大国主社大神輿 (明治12年製作) 解体修復工事完成し、町内に披露した。 修復業者は鎌倉一二所 (株) 東京神輿センター。 工事内容は神輿本体分解修復作業・金属金メッキ後再取り付け等。 総修復費用528万円 氏子会・町内会・柏樹会で負担した。 その後、7月の大国主社夏季祭礼で担ぎ初めをした。
	4月	市動物愛護センターが完成し、式典が行われた。
	8月	田川誠一氏 (元自治相・国家公安委員長) が死去する。享年91歳
平成22年 (2010年)	3月	第1回「Yフェスタ追浜」が追浜駅前・日産グラウンド・貝山緑地周辺を 主な会場として、開催される。
平成23年 (2011年)	3月	東日本大震災により、深浦では大国主社の夏季祭礼を中止した。
	4月	町内会館改修工事完了する。 工事費用400万円はマンション 「ルネ追浜」の施行者 (株) 総合地所より、全額寄付を受けた。
	4月	グループホーム「あんずの家」(浦郷町4丁目) が業務開始する。
	4月	「浦郷3丁目公園」が完成し、供用開始した。 「ルネ追浜」の施行業者 (株) 総合地所より、市に提供した公園。
	9月	全市一斉津波避難訓練が行われた。 深浦の避難会場は4月開園した 浦郷3丁目公園 (海拔25m) で田浦警察署警官立会で行った。
平成24年 (2012年)	2月	第1回追浜マラソン (主催追浜連合町内会) が開催される。 従来の追浜健康マラソン改め、本格的マラソン競技とした。
	5月	マンション「ルネ追浜」第1期工事竣工し、落成式行う。 以後3年間で3街区490戸入居した。
	10月	浦郷三町内合同防災訓練が、榎戸浦郷公園で実施された。。
	11月	県立追浜高等学校、創立50周年記念式を挙げる。
平成25年 (2013年)	1月	第1回追浜七福神めぐり (主催追浜観光協会) が開催されされる。独園寺、

		正禅寺、観音寺、能永寺、自得寺、良心寺、法福寺 以上が七福神
	4月	サンビーチ追浜から主力店「ヨコサン」が撤退、代わりに「京急ストア追浜店」が開店する。同時に「スパーク浦郷店」が「京急ストアスパーク浦郷店」として新たに開店する。
平成26年 (2014年)	1月	三浦藤沢信用金庫が「かながわ信用金庫」と改称、かながわ信用金庫追浜支店となる。
	11月	浦郷三町内合同防災訓練が、深浦みなど緑地で実施された。
平成27年 (2015年)	4月	元県立横須賀高等職業技術校の跡地に60戸の分譲建売住宅が完成し入居者は深浦町内会に入会した。(23組～26組)
	4月	アイ・ライブ・サポート合同会社(あずりはデイサービス)が設立される。
	5月	官修墓地に眠る榊原謙齋(新潟県土族・新選旅団所属・明治10年10月29日没)の曾孫4人が、138年ぶりに墓参のため深浦を訪ねた。これで、遺族が判明したのは3人目である。
	11月	市営深浦改良アパートが老朽化のため、解体することになり入居者の移転が完了した。46年間の歴史であった。
平成28年 (2016年)	6月	大国主社境内崖地を神奈川県急傾斜地対策事業の擁壁工事が完成した。工事期間延べ3年間
	11月	浦郷三町内合同防災訓練が、榎戸浦郷公園緑地で実施された。。
平成29年 (2017年)	4月	旧日産自動車研修所跡地(浦郷町4丁目12番地)に分譲建売住宅が完成し、入居者は深浦町内会に入会した。(27組～31組)
	11月	災害避難所生活訓練が浦郷小学校で行われた。小学校管内13町内会合同訓練。婦人防火クラブ・北消防署等が支援参加した。
平成30年 (2018年)	12月	浦郷三町内合同防災訓練が、榎戸浦郷公園で実施された。
平成31年 (2019年) 令和元年	5月	皇位継承 平成から令和へ 平成の天皇陛下が4月30日退位され、皇太子徳仁親王殿下が5月1日午前0時、第126代天皇に即位された。 皇位継承に伴い、「平成」は30年3か月余りで幕を下ろし、新元号は「令和」に改まった。皇太子妃雅子さまは皇后となられた。 平成の天皇陛下は上皇に 皇后さまは上皇后に。
	6月	老人ホーム「よこすか花珠の家」(深浦、天子台跡地)が新築完成し、業務を開始した。入居定員70人70室。
	7月	「横浜DeNAベイスターズ」合宿所・室内練習場・グラウンドが、長浦より追浜公園内に新築移転し、開所式を挙行了した。
	10月	独園寺創建400周年を迎えた。創建元和5年10月20日(1619年)
令和2年 (2020年)	年初より	新型コロナウイルスが蔓延する。
	4月	深浦町内会2年度定期総会は、新型コロナウイルス感染予防のため初の文書による決議にて行われた。
	7月	大国主社の夏まつりは新型コロナウイルス感染予防のため、中止となった。町内会行事もすべて中止となった。
令和3年 (2021年)	3月	大国主社に中神輿を購入した。旧神輿は老朽化のため祈禱し廃棄した。
	4月	深浦町内会3年度定期総会は、2年度同様に感染予防のため書面決議にする。
	11月	市営深浦改良アパートの解体工事完了。更地となった。
令和6年 (2024年)	2月	深浦町内会が、横須賀市長より、官修墓地の維持管理の功績により、表彰状授与。
	6月	深浦町内会が、警視総監より官修墓地の長年供養した功績により、感謝状授与。
	10月	浦郷小学校、創立150周年の式典を挙行的する。
令和7年 (2025年)	1月	深浦町内会発足75周年を迎えた。昭和25年1月(1950年)発足 大国主社創建400周年を迎えた。寛永3年(1625年)創建

《表紙写真・深浦湾より》

上 昭和36年頃

下左 現在の風景

下右 3丁目公園から深浦湾

《裏表紙写真・大国主社 夏まつり》

平成12年 夏まつり

出典・参考文献・協力文献

深浦に就いて、他深浦文化シリーズ 生方 直方 著

新・追浜歴史年表(追浜地域運営協議会)

上杉 孝良 著

追浜の歴史探訪シリーズ

青木 猛 著

おっばまぶらり散歩 より

追浜地域運営協議会発行

マップ協力提供

創楽舎 河村 啓子 著

《深浦の歴史と文化財》

令和7年(2025年)5月発行

編者 今村 恭啓、石渡 弘、小峰 廣志

発行 深浦町内会

横須賀市浦郷町3丁目66番地11

電話 046-865-1853

印刷 丸庄有限会社

横須賀市追浜東町2丁目37番地

電話 046-865-4284